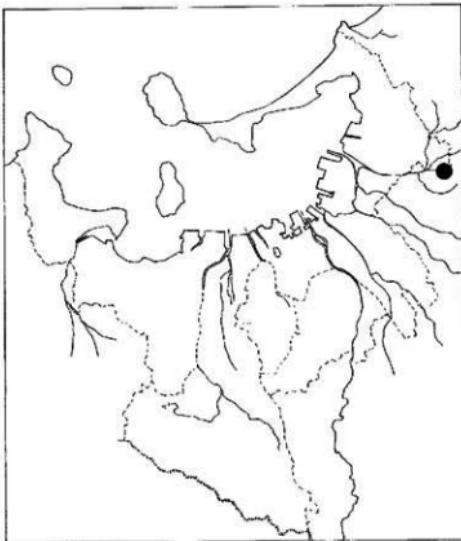


かま た へ き ばる
蒲田部木原4次



1997

福岡市教育委員会

序 文

福岡市東区蒲田は福岡市域の南東部にあたり、粕屋郡柏原町、久山町と境を接しています。この一帯には国道201号線、九州縦貫自動車道福岡インターチェンジなどがあり、流通のアクセスポイントとして近年開発が急速に進んでいる地域であります。

また、蒲田が位置する船屋平野は旧石器時代からの遺跡が発見されている地域であり、最近では縄文時代晚期の大集落である江辻遺跡が調査されています。今回の発掘調査では弥生時代から古墳時代にいたる集落が発見されました。本書は、その成果を報告するものです。

本書が埋蔵文化財の保護と知識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いです。また、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに對し、心から謝意を表す次第であります。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

例 言

1. 本書は、1995年度に行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が調査を実施した蒲田部木原遺跡群第1次調査の報告書である。調査の担当は加藤隆也である。
 2. 本書に使用した遺構の実測は久住猛雄、井上蘭子、井上義也、西山めぐみ、多田敷、相良大輔、緒方英、秦小麗、加藤が、遺物の実測図は入江のり子、加藤が行った。製図は入江、加藤が行った。
 3. 本書に使用した遺構、遺物の写真は加藤が撮影した。
 4. 遺構の呼称は記号化し堅穴住居をS C、掘立柱建物をS B、土坑をS K、溝をS D、柱穴をS Pとした。
 5. 本書で用いる方位は全て磁北である。
 6. 本書の執筆は加藤が行った。
 5. 本報告に係るすべての出土遺物・記録類(図面・写真・スライドなど)は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

| | | | | | |
|--------|---------------------|--------|---------------------|--------|---------------------|
| 遺跡調査番号 | 9517 | | 遺跡略号 | KHH-4 | |
| 調査地地番 | 東区蒲田2丁目777-1 | | 分布地図番号 | 蒲田2 | |
| 開発面積 | 7,602m ² | 調査対象面積 | 2,700m ² | 調査実施面積 | 2,915m ² |
| 調査期間 | 1995年6月1日～9月19日 | | | | |

本文 目 次

| | |
|------------------|----|
| Iはじめに | 1 |
| 調査に至る経緯 | 1 |
| 調査の組織 | 1 |
| II調査の記録 | 2 |
| 調査の概要 | 2 |
| 1) 壺穴住居跡 (S C) | 2 |
| 2) 掘立柱建物 (S B) | 7 |
| 3) 小型壺穴状遺構 (S X) | 8 |
| 4) 土坑 (S K) | 10 |
| 5) 溝 (S D) | 15 |
| 6) 調査区南東谷部 | 32 |
| III小 結 | 32 |

挿 図 目 次

| | |
|-------------------------------|------|
| Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000) | 1 |
| Fig. 2 調査地点位置図 (1/1,000) | 2 |
| Fig. 3 遺構配置図 (1/250) | 折り込み |
| Fig. 4 S C-O 1、O 2実測図 (1/60) | 3 |
| Fig. 5 S C-O 3、O 4実測図 (1/60) | 4 |
| Fig. 6 S C-O 5実測図 (1/60) | 5 |
| Fig. 7 S C-O 6、O 7実測図 (1/60) | 6 |
| Fig. 8 S C-O 8、O 9実測図 (1/60) | 7 |
| Fig. 9 S C-1 0実測図 (1/60) | 8 |
| Fig. 10 S C-1 1、1 2実測図 (1/60) | 9 |
| Fig. 11 S C-1 3実測図 (1/60) | 10 |
| Fig. 12 S C出土遺物実測図 1 (1/4) | 11 |
| Fig. 13 S C出土上遺物実測図 2 (1/4) | 12 |
| Fig. 14 S B-O 1、O 2火測図 (1/60) | 13 |
| Fig. 15 S B-O 3実測図 (1/60) | 14 |
| Fig. 16 S X-O 1~O 5火測図 (1/40) | 16 |
| Fig. 17 S X-O 6~O 8実測図 (1/40) | 17 |
| Fig. 18 S X出土遺物実測図 (1/4) | 18 |
| Fig. 19 S K火測図 1 (1/40) | 20 |
| Fig. 20 S K実測図 2 (1/40) | 21 |
| Fig. 21 S K出土上遺物実測図 (1/4) | 22 |
| Fig. 22 S K-4 1、4 2火測図 (1/40) | 23 |
| Fig. 23 S K-4 2出土遺物実測図 (1/4) | 23 |

| | |
|--|----|
| Fig.24 SD-O1出土遺物実測図1 (1/4・1/6) | 24 |
| Fig.25 SD-O1出土遺物実測図2 (1/4) | 25 |
| Fig.26 SD-O2出土遺物実測図1 (1/4) | 26 |
| Fig.27 SD-O2出土遺物実測図2 (1/4) | 27 |
| Fig.28 SD-O2出土遺物実測図3 (1/4) | 28 |
| Fig.29 SD出土遺物実測図1 (1/2・1/4) | 29 |
| Fig.30 SD出土遺物実測図2 (1/4) | 30 |
| Fig.31 出土石製品 (1/2・1/4) | 31 |
| Fig.32 調査区南東谷部出土遺物 (1/4) | 32 |

図 版 目 次

| | |
|------------------------------|-----------------------|
| P L. 1(1)調査区全景 (南から) | |
| (2)SC-O1検出状況 (南から) | (3)SC-O2検出状況 (南西から) |
| P L. 2(1)SC-O3検出状況 (西から) | (2)SC-O4検出状況 (東から) |
| (3)SC-O5検出状況 (北西から) | (4)SC-O6検出状況 (北西から) |
| (5)SC-O7検出状況 (東から) | (6)SC-O8検出状況 (東から) |
| (7)SC-O9、O10検出状況 (北西から) | (8)SC-11検出状況 (北西から) |
| P L. 3(1)SC-12検出状況 (東から) | (2)SC-13検出状況 (東から) |
| (3)SX-O1検出状況 (北から) | (4)SX-O2検出状況 (東から) |
| (5)SX-O3検出状況 (南から) | (6)SX-O4検出状況 (西から) |
| (7)SX-O5検出状況 (南東から) | (8)SX-O7検出状況 (北西から) |
| P L. 4(1)SX-O8検出状況 (南から) | (2)SK-O1検出状況 (北東から) |
| (3)SK-O2検出状況 (南西から) | (4)SK-O8、O9検出状況 (東から) |
| (5)SK-13検出状況 (北西から) | (6)SK-26検出状況 (南西から) |
| (7)SK-42検出状況 (北から) | (8)SK-42遺物出土状況 (西から) |
| P L. 5(1)SD-O1検出状況 (北東から) | (2)SD-O1遺物出土状況 (北東から) |
| (3)SD-O2検出状況 (北から) | (4)SD-O2遺物出土状況 (北から) |
| (5)SD-O3鋸削状況 (北西から) | (6)SD-O3石剣出土状況 (西から) |
| (7)SD-O8土層断面 (南東から) | (8)溝検出状況 (東から) |
| P L. 6 出土遺物 | |
| P h. 1 調査区と部木八幡古墳群を望む (北西から) | |

表 目 次

| | |
|-----------------------------|----|
| T a b 1. 出土上器觀察表1 | 33 |
| T a b 2. 出土土器觀察表2 | 34 |

Iはじめに

調査に至る経緯

1995年3月7日、東区前田2丁目777-1における物流用倉庫建設に伴う埋蔵文化財調査事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの前田部木原遺跡群の西側に位置している。福岡市教育委員会が、これを受け1995年3月28日に試掘調査を実施した。現況は水田で、調査の結果、耕作土下約20~50cmのローム層上面にて遺構が確認された。よって、面積2,700m²を対象に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は1995年6月1日~同年9月19日まで行った。

調査の組織

調査委託 駿和運輸株式会社

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 尾花剛（前） 町田英俊（現）

調査総括 文化財部長 後藤眞

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

埋蔵文化財課第2係長 山口讓治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 内野保基 西田結香

調査担当 埋蔵文化財課第2係 加藤隆也

試掘調査 普波正人

発掘作業員 伴守常 長延企 川端ミエ子 長キヌ子 長嘉鶴子 反尊子 長トシ子 長英美子
長喜美子 八尋ヒサ子 楠島敏子 因マツヨ 因喜美子 城戸俊子 浜近ミトセ
黒瀬喜美子 田嶋勝代 田代イツコ 脇田栄 池里子 大音舞子 草場恵子 小池温子
指原始子 寺園恵美子 中村幸子 永田優子 平本恵子 安元尚子 柳瀬伸 古村智子
井上蘭子 乙部武彦 坂本寛 藤井克彦 井上義也 相良大輔 西山めぐみ 多田敦
諸方英 秦小庭



Fig. I 周辺古墳分布図 (1/25,000)

- | | | | | | | |
|-----------|---------|-----------|----------|------------|------------|------------|
| 1. 今回調査地点 | 2. 土井遺跡 | 3. 名子遺古墳 | 4. 天神森古墳 | 5. 藤田原遺跡 | 6. 藤田水ヶ元遺跡 | 7. 前田部木原遺跡 |
| 8. 郡八幡古墳群 | 9. 平塚古墳 | 10. 藤田山古墳 | 11. 江辻遺跡 | 12. 西尾山古墳群 | 13. 江辻遺跡 | 14. 戸原庚尾遺跡 |

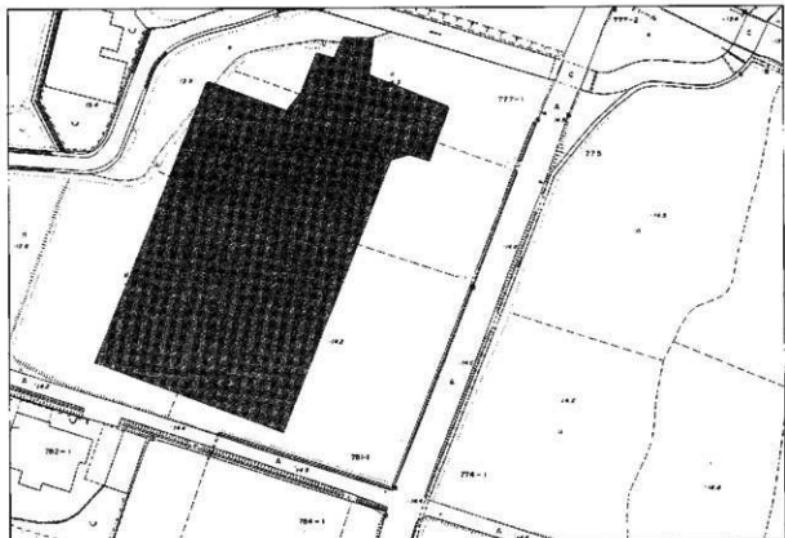


Fig.2 調査地点位置図 (1/1,000)

II調査の記録

調査の概要

今回の調査地点は蒲田部木原遺跡の西側に位置し、遺跡分布地図の上では遺跡内には含まれていない。ただし、現在の部木八幡の北側丘陵は、調査地の東側約110mの地点で大きく削られており、本来の丘陵は緩やかに西側に延びていたものと思われる。よって、蒲田部木原遺跡の第4次として調査をおこなった。

遺構面は耕作土直下において検出され、調査区内における遺構面は、ほぼ平坦で遺構検出レベルにあまり高低差はない。検出された遺構は弥生時代前期から古墳時代にいたるもので竪穴住居、掘立柱建物、竪穴状遺構、上坑、溝、柱穴などである。住居跡は西から延びる丘陵の延長線上にあたる調査区北側に集中しており、上記したことを裏付ける結果を得た。溝は調査区全面から検出され、なかでもSD-O1、O2は丘陵線上の微高地を横断するように掘られており、多くの遺物が出土した。他の溝は調査地点と部木八幡古墳群の位置する丘陵間の谷部に向かっており、谷部の利用がいかなるものであったのか今後注目される。

1) 竪穴住居跡 (S C)

13基の竪穴住居を調査した。本来調査区北側は微高地であり、居住城として良好な条件をもっていたと思われるが、後世の削平が著しく、概して遺構の残存は良くない。また、竪穴住居としてまとめたなかには小型のもので主柱穴、炉跡などがみられないものもあり、今回SXとしてまとめた竪穴



Fig.3 造構配置図 (1/250)

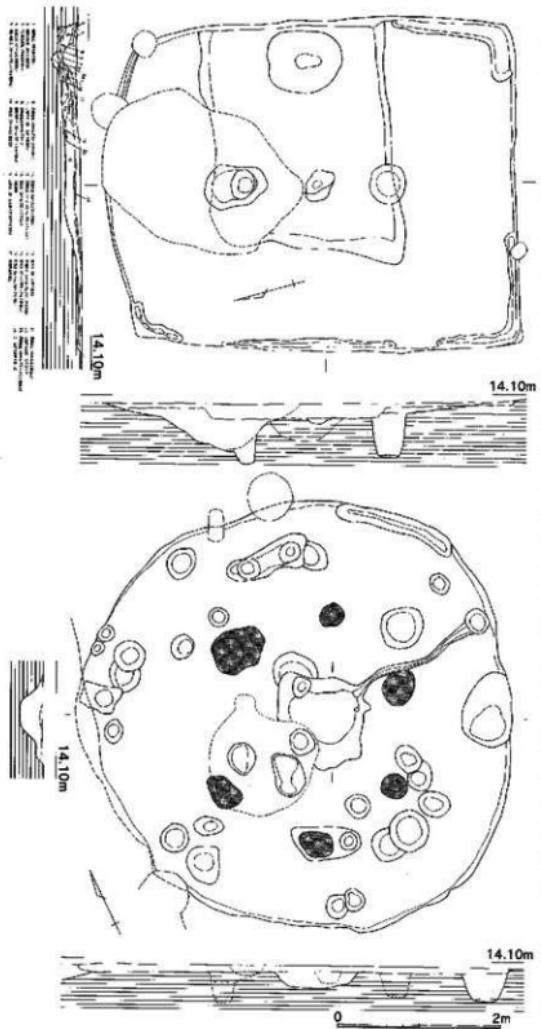


Fig.4 SC-01,02 実測図 (1/60)

受けており、残存の良好な部分で深さ10cmを測る。上柱穴は径2.6~2.8mでめぐる6本である。中央には上坑がつくられており、やや延びしながら東側に延びる幅約10cmの溝が付設されている。この溝が住居外へ延びるかどうかは今回の調査では確認されなかった。中央土坑の覆土上面には少量であるが焼土と炭化物がみられる。

状造構に含まれる性格を有するものも幾つかあるとおもわれる。

SC-01 (Fig.4, PL. 1)

調査区北側に位置し、SD-O2、SX-O2を切り、SK-O1に切られる。南北5.1m、東西4.1mを測る方形を呈する。削平を受けており、浅い部分では深さ5cmを測る。「コ」字形のベット状造構が付設されている。ベット状造構の部分は掘り方の時点でやや高くなるように地山を削り出しており、さらに地山土を貼って整えている。壁際には東側中央部を除き15~25cmの溝がめぐる。主柱穴は2本であり、柱間隔は1.75mを測る。中央に径約35cm、深さ7cmの炭化物を少量含んだピット状造構があり、炉跡と思われる。東側壁際には別の遺構に切られるが、浅い張際土坑がみられる。

出土遺物 (Fig.12) 遺物は削平のため多くは検出されなかった。1は甌の口縁部の破片である。遺構の時代は住居の形態と遺物から弥生時代後期終末から古墳時代前期に位置づけられる。

SC-02 (Fig.4, PL. 1)

調査区北側に位置し、住居西側をSD-O2に切られ、中央部をSK-O2に切られる。直径約5.4mを測り、削平を著しく

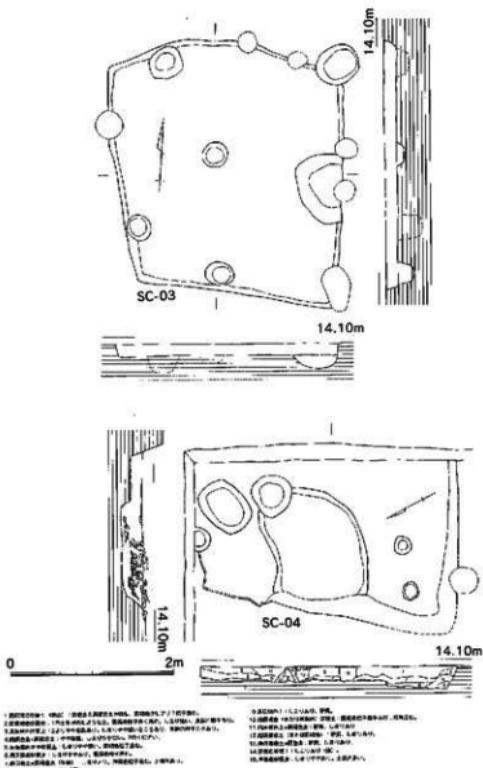


Fig.5 SC-03, 04 実測図 (1/60)

上中から出土している。片刃石斧は全長8.5cm、幅2.6cm、厚さ2.3cmを測る。石鎌は磨製のもので全長3.8cm、最大幅2.0cmを測る。遺構の時代は出土遺物から弥生時代の中期後半と考えられる。

SC-04 (Fig.5, PL.2)

調査区北東隅にて検出した。遺構は東側調査地外にのびる。検出範囲における一边は3.1m、深さ1.5cmを測る。確認された2つの住居角は南側が鋭角に、北側が鈍角に屈曲しており平面形は不整四角形を呈するものと思われる。床面に10cmほどの深い部分があり、その部分から床面にかけて遺物が集中して出土した。

出土遺物 (Fig.12) 4、5は甕である。口縁は繩形に仕上げ、胴部はあまりふくらまず、底部はやや上げ底である。6、13は甕の底部である。13の外側には断面三角形の突帯がめぐる。7、8は蓋である。9、10、11は壺である。9の底部には上器焼成前の穿孔がみられる。12は鉢である。14～17は器台であり、14～16の精製のものと17の粗製のものがある。遺構の時代は出土遺物から弥生時代中期前半の範疇に位置づけられる。

出土遺物 遺構の残存が悪く、時期を特定できる良好な遺物は出土しなかった。上げ底の壺の底部破片が縦土中に出土している。遺構の時代は出土遺物と遺構の切り合から弥生時代中期の前半から中ごろが考えられる。

SC-03 (Fig.5, PL.2)

調査区北側にて検出された。SD-O3、SX-O7を切る。長軸3.1m、短軸2.85m、深さ1.5cmを測る不整長方形を呈する。壁の立ち上がりは直線的で、東側壁際に幅85cm、深さ18cmの土坑がみられる。遺構の壁際にいくつかのピットがみられるが、主柱穴は不明である。被熱部分は中央部を含めてみられなかつた。

出土遺物 (Fig.12) 2は跳ね上げ口縁系の甕口縁破片である。3は粗製の器台下部である。この器台は住居址の床面ほぼ中央に立った状態で検出された。

また石器には柱状片刀石斧 (Fig.31-1) と石鎌 (Fig.31-2) が覆

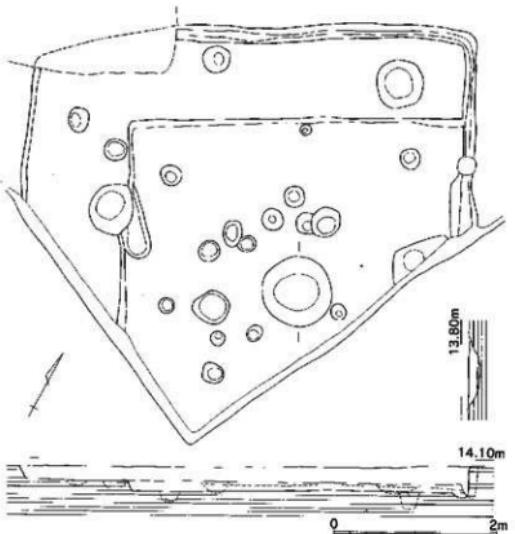


Fig.6 SC-05 実測図 (1/60)

出土遺物 (Fig.13) 18は複合II線壺の口縁部破片。19は凸レンズ状の甕底部。20は甕底部。21は甕の口縁部である。石器では石臼丁 (Fig.31-3) が出土している。全長9.0cm、幅4.8cm、穿孔間は2.5cmを測る。石材は小豆色凝灰岩ホルヘンスである。遺構の時代は弥生時代後期終末に位置づけられる。

SC-06 (Fig.7, PL.2)

調査区北東部にて検出された。南東部はSC-05を切り、西側はSK-13を切る。長軸4.4m、短軸3.9mを測る。著しく削平を受けており残存する深さは約10cmを測る。多くの柱穴と切り合っており、主柱穴を特定できなかった。住居址は中央部に焼土と炭化物が集中する部分があり、炉跡と考えられる。

出土遺物 (Fig.13) 22は鉢である。遺構の時代は出土遺物から5世紀代に位置づけられる。

SC-07 (Fig.7, PL.2)

調査区北東部にて検出された。SD-03、SX-06を切る。南北3.1m、東西2.8m、深さ25cmを測る。東側に柱穴がいくつかみられるが、住居址床面上では主柱穴、炉跡は確認されなかった。遺物は主に床面北側において出土した。

出土遺物 (Fig.13) 25、26、27は甕の上半部である。27はII線内面に明瞭な稜をもち「く」字形に屈曲する。28は臺の底部で外面に赤色顔料を塗布している。遺物は占い様相を示すものも出土しているが弥生時代中期後半に位置づけられる。

SC-08 (Fig.8, PL.2)

調査区北東部にて確認された。層上は地山土と近似する黄茶褐色砂質土であった。SC-06、O7と切り合い関係にあるが削平が著しく、層位的に新旧は確認できなかった。南北5.7m、東西4.0m

SC-05 (Fig.6, PL.2)

調査区北東部に位置し、南側は調査地外へのびる。SX-05を切り、SC-06に切られる。一辺5.3mを測り、北側、西側には高さ約10cmのベット状遺構がみられる。ベット状遺構は住居掘り方段階で削りだしてつくられ地山土により整えられている。住居北側と東側壁際には幅10~15cmの溝がめぐる。主柱穴は不明であるが、径約80cmの炉跡と思われるものが確認された。炉の位置する低い部分では地山下層の裸層上面がすでに露出している。仮にこの炉跡が住居址の中央部に位置するなら、住居の規模は6.6×5.3mの長方形を呈すると推測される。

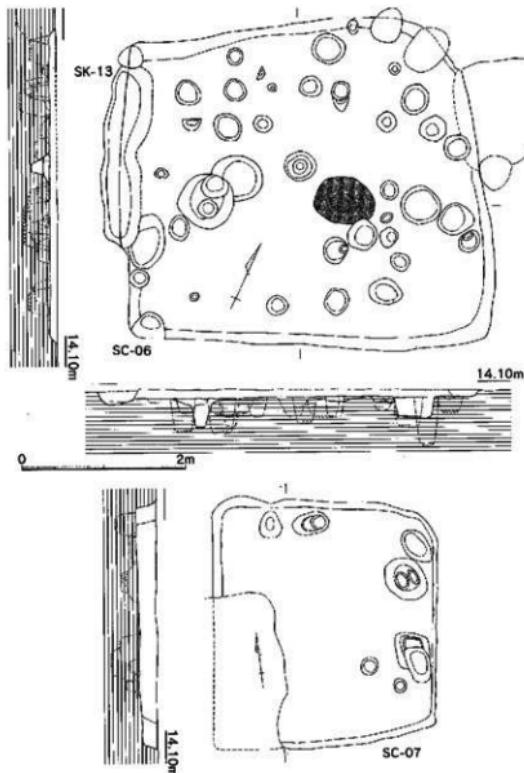


Fig.7 SC-06, 07 実測図 (1/60)

8m、深さは15cmを測り、平面は隅丸方形ないしは長方形を呈すると考えられ、住居址壁際には幅10～20cmの溝が部分的にみられる。土柱穴は4本と思われ、深さ35cmと45cmを測る柱穴が2穴みられる。炉跡の有無は不明である。

出土遺物 (Fig.13) 29は小型の甕の上半部である。遺構の時代は出土遺物から5世紀から6世紀に位置づけられる。

SC-11 (Fig.10, PL.2)

調査区中央部の東側にて検出された。遺構の南側を擾乱溝に切られる。長軸4.7m、短軸3.2mを測る隅丸長方形を呈し、南北側の幅がやや広く、北東側はやや狭い。深さは約15cmを測る。壁際には幅10～25cmの溝がめぐり、南北壁中央部は一部切れる。主柱穴は床面上ではみられなかった。床面南北部に土坑状のものが位置するが焼土、炭化物等は検出されていない。遺構に伴う遺物は出土しなかつた。

SC-12 (Fig.10, PL.3)

調査区中央部西側にて検出された。SD-06に切られる。平面形は南北、東西3.9mを測り、東

を測り、小判形を呈する。北側は深さ約20cm残存しているが、南側は5cmほどしか残存していない。主柱穴は4本と思われる。遺構に伴う遺物は出土していないが、住居の形態から古墳時代に属する遺構と考えられる。

SC-09 (Fig.8, PL.2)

調査区北東部にて検出された。SC-10に切られる。住居の東側は調査区外にのびる。住居の規模、主柱穴の位置や数は不明である。住居址内中央部の調査区壁際に土坑状の遺構がみられる。壁際には幅約30cmの溝がめぐり、その中に直径5～15cmの杭列がみられる。北側の杭列は密であり、3m間に16本みられる。西側杭列はそれに比べ粗であり2.5m間に6本である。遺構に伴う遺物は出土していない。

SC-10 (Fig.9, PL.2)

調査区の北東部にて検出されSC-09を切る。住居の大半は東側調査区外にのびる。一辺6.

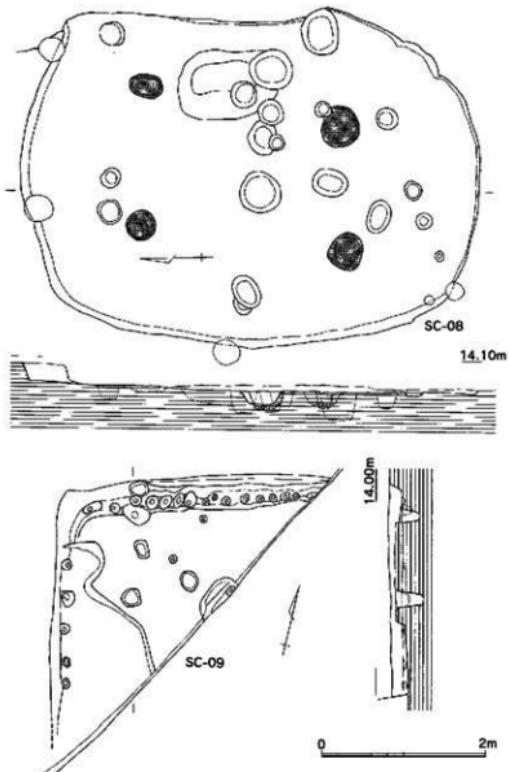


Fig.8 SC-08,09 実測図 (1/60)

側がやや広がる圓丸方形を呈する。残存する深さは5cmを測り、壁際には部分的に溝がみられる。住居址4箇のうち3箇には浅い柱穴状のものがあり、4本の主柱穴をもつと考えられる。床面東側には焼土と炭化物が検出された径30cmを測る痕跡がみられる。東側壁際には長軸70cm、短軸60cm、深さ17cmの土坑がつくられている。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

SC-13 (Fig.11, PL. 3)

調査区南側にて検出された。南側を溝に切られる。平面は南北3.35m、東西3.85mを測り、壁際には幅10~15cmの溝が部分的にみられる。残存は5cmを測る。南側壁際の中央部に反軸1.05m、短軸65cm、深さ5cmを測る土坑状のものがあり、両側に80cm離れて杭跡状ピットがみられる。また、この部分は壁溝が途切れる。主柱穴は不明である。遺構に伴う遺物は出土していない。

2) 据立柱建物 (SB)

調査において数百を越えるピットを検出したが建物として復元されたものは下の3棟のみである。調査区北側は特にピットの密度が高く、それ故に建物の復元が困難であった。ピット出土遺物では弥生土器片が目に付くが、層位、覆土などから時代を特定できるものは少ない。

SB-01 (Fig.14)

調査区中央部や北側にて検出された。1間×1間の建物である。梁行3.1m、桁行4.3mを測り、主軸はN-57°Wをとる。4穴の柱穴のうち3穴は幅60~70cm、長さ1.7~2.0mの溝状を呈し、方向を同じくする。北側の1穴だけは径80cmの円形を呈する。柱穴の深さは20~35cmを測り、削平を考慮しても他の柱穴に比べ浅い。時代を特定できる遺物は出土していない。

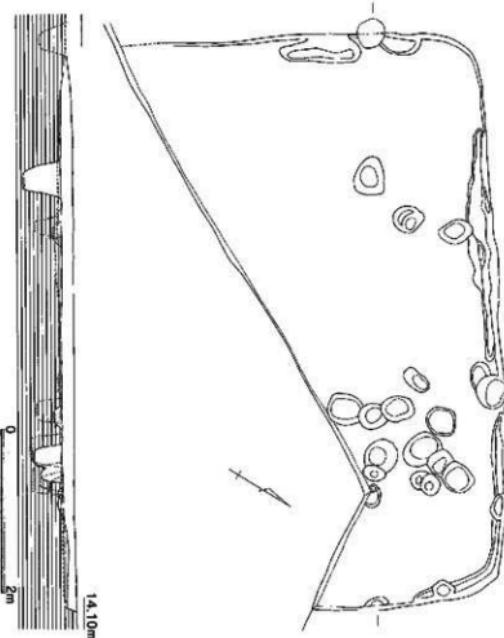


Fig.9 SC-10 実測図 (1/60)

SB-O2 (Fig.14)

SB-O1の東側に位置する。2間×2間の建物である。梁行3.3m、桁行3.7mを測り、主軸はN-8°-Wをとる。柱穴の平面は大半は円形を呈するものもあり、直径は35~55cmを測る。北側柱穴列の中央が最も深さが浅く20cmを測る。他の柱穴は深さ35~45cmを測る。南北の中央軸の2つの柱穴はやや東側に偏る。時代を特定する遺物は出土していない。

SB-O3 (Fig.15)

調査区北側に位置する。SX-O3、O4を切る。1間×2間の建物である。梁行3.1m、桁行4.4mを測り、主軸N-79°-Wをとる。柱穴の平面は40~50cmの円形のものと不定形を呈するものがある。柱穴の深さは北西隅のものが最も浅く20cmを測る。深いものは南側柱穴列の中央のもので約55cmを測る。時代を特定できる遺物は出土していない。

3) 小型竪穴状遺構 (SX)

8基の竪穴状遺構を検出した。規模としては方形ないしは長方形の平面形をもつもので、短辺が1.5m以下のものをまとめた。遺構の性格としては同一のものではなく、時間的にも差異があるが、性格の特定が困難なためSXとした。

SX-O1 (Fig.16, PL.3)

調査区北西部に位置する。遺構の大半は北西側の調査区外にのびる。一辺は2.1mを測り、深さは35cmを測る。底面はほぼ平坦である。北東の壁際に長軸60cm、短軸40cmの土坑がみられる。

出土遺物 遺物は少なく、炭化していない赤色顔料を器壁外面に塗布した上器片が出土しており、遺構の時代として弥生時代中期以降と考えられる。

SX-O2 (Fig.16, PL.3)

調査区北側に位置し、北東部をSC-O1に切られる。平面は長軸2.1m、短軸1.9mを測る隅丸方形を呈する。深さは35cmを測り、底面は平坦である。壁は火を受け赤色化しており、底面に炭化物の堆積する薄い層がみられた。覆土の上層は地山と近似する黄茶褐色粘質土であった。遺構の性格とし

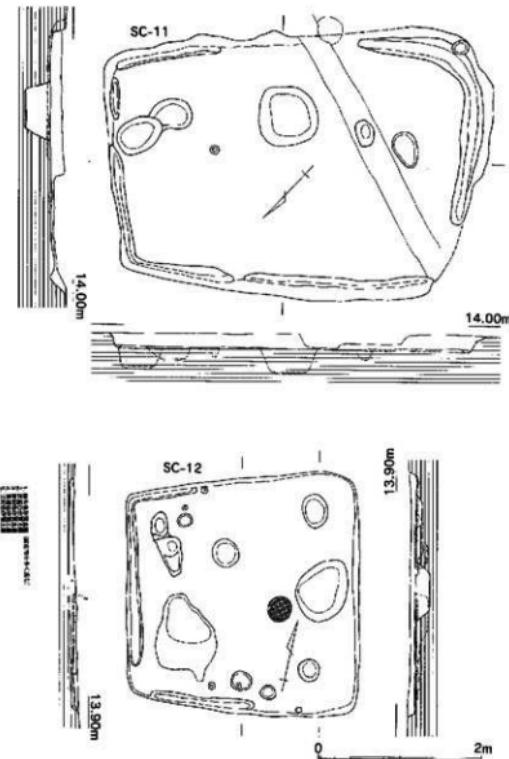


Fig.10 SC-11, 12 実測図 (1/60)

SX-O3の南側に位置する。平面は長軸2.9m、短軸1.9mを測る隅丸長方形を呈する。深さは35cmを測り、底面は平坦である。底面上には土器が集中してみられた。

出土遺物 (Fig.18) 36、37、38、39は甕の上部である。口縁断面はコ字形を呈する。40~42は甕の底部で、42は強い上げ底となり他の2点より古い様相を示す。43、44は壺である。45は鉢である。遺構の時代は遺物から弥生時代中期前半の範疇に位置づけられる。

SX-O5 (Fig.16, PL.3)

調査区の北側に位置し、SC-O6の床面から検出された。平面形は長軸3.5m、短軸2.2mを測る隅丸長方形を呈する。深さは20cmを測り、床面は中央部がやや低い。床面にピット状遺構がいくつかみられるがすべてが遺構に伴うものとは考えられない。

出土遺物 (Fig.18) 46は甕の上部であり、口縁断面は歛先形を呈する。47、48、49は壺の底部である。48はやや新しい様相を示す。遺構の時代は弥生時代の中頃に位置づけられる。

SX-O6 (Fig.17)

調査区北側に位置し、SC-O7を切り、SC-O6に切られる。SX-O5との切り合は確認

て土器の焼成上坑の可能性が考えられる。遺物は底面にて多くみられた。

出土遺物 (Fig.18) 30、31は甕の口縁部である。30は断面く字形を呈し、31は大型の甕の口縁である。32、33は甕の底部で、32の底部は穿孔されている。34は壺である。遺構の時代は弥生時代後期前半に位置づけられる。

SX-O3 (Fig.16, PL.3)

SX-O2の南側に位置する。平面は長軸2.35m、短軸1.95mを測る隅丸長方形を呈する。深さは25cmを測り、底面は平坦である。埋土は地山と近似する黄茶褐色砂質土であった。柱穴等はみられない。

出土遺物 (Fig.18) 35は甕の口縁である。鋸先口縁のもので、遺構の時代は川土遺物から弥生時代中期後半ごろと考えられる。

SX-O4 (Fig.16, PL.3)

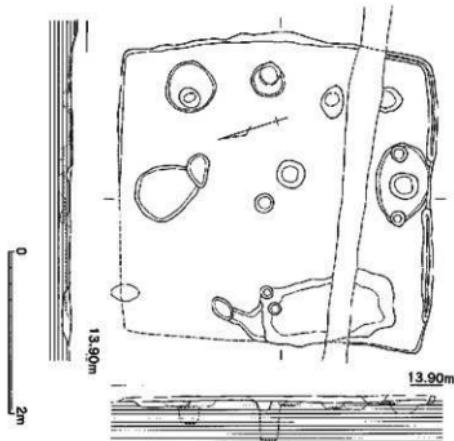


Fig.11 SC-13 実測図 (1/60)

S X - O 7 (Fig.17, P L. 4)

調査区北端にて検出され遺構は北側の調査区外へのびる。一辺は1.8mを測り、深さは50cmを測る。壁は直線的に立ち上がり、底面は平坦である。遺構の覆土は水平堆積をする。弥生土器片が出土しているが、同化できる良好な遺物はない。遺構の時代は弥生時代中期以降と考える。

4) 土坑 (S K)

S K - O 1 (Fig.19, P L. 4)

調査区北側に位置し、S C - O 1 を切る。平面は長軸2.5m、短軸1.7mを測る不定形を呈する。底面は南側がやや深く緩やかに開く。

出土遺物 (Fig.19) 50は壺の下部である。遺構の時代は出土遺物から4世紀から5世紀に位置づけられる。

S K - O 2 (Fig.19, P L. 4)

調査区北側に位置し、S C - O 2 を切る。径1.3mを測る不定形を呈する。

出土遺物 (Fig.21) 51は断面く字の壺口線の破片である。52は壺の底部である。遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

S K - O 8 (Fig.19, P L. 4)

調査区北側に位置し、S K - O 9 を切る。平面は幅55cm、長軸1.7mを測る長梢円形を呈する。底面は船底形である。

出土遺物 (Fig.21) 53は壺の上部である。口縁の端部はやや下方に垂れ、口縁下に断面三角形の突帯が巡る。遺構の時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

できなかった。平面は長軸1.6m、短軸1.4mの長方形を呈する。深さは約5cmを測り、底面はほぼ平坦である。出土遺物は少なく、弥生土器片が出土している。遺構の時代は切り合いから弥生時代中期後半ごろと思われる。

S X - O 7 (Fig.17, P L. 3)

調査区北側に位置し S D - O 3 を切り、S C - O 3 に切られる。平面は長軸2.4m、短軸1.9mの不整形を呈する。深さは15cmを測る。弥生土器片が出土しているが、時代を特定できる遺物は出土していないが、遺構の切り合いから弥生時代の中前期前半から中ごろの遺構と思われる。

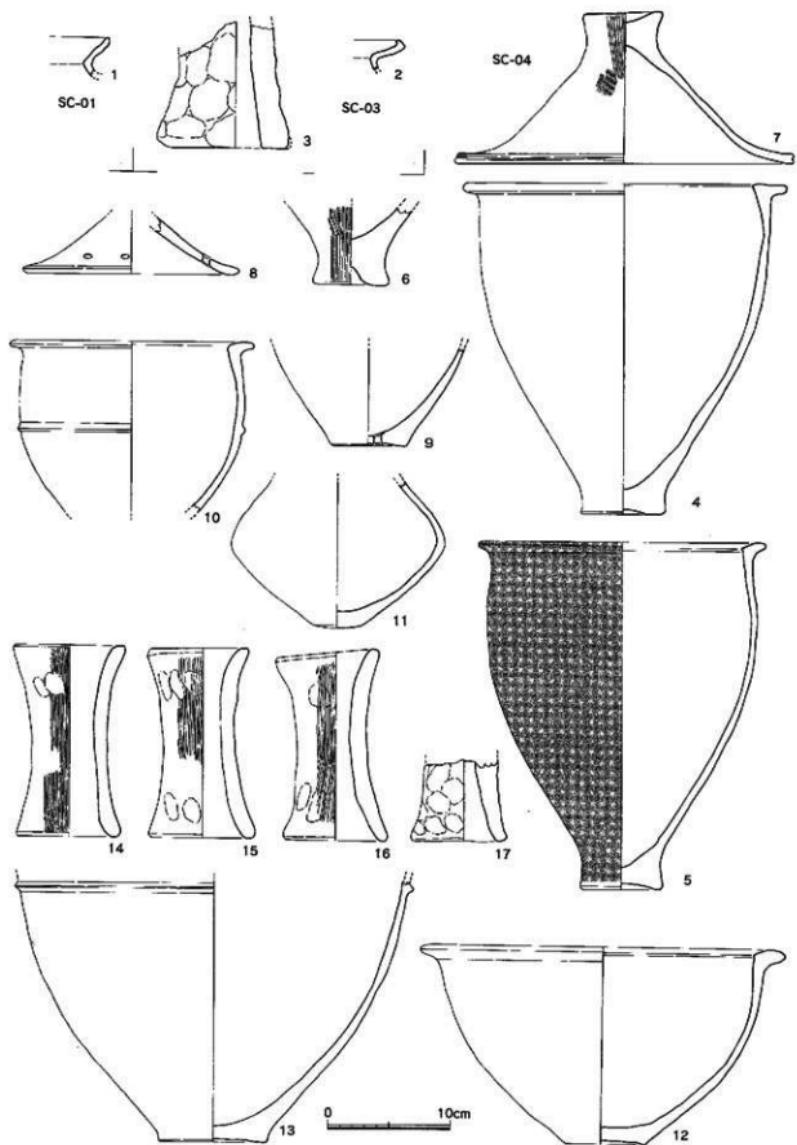


Fig.12 SC出土遺物実測図1 (1/4)

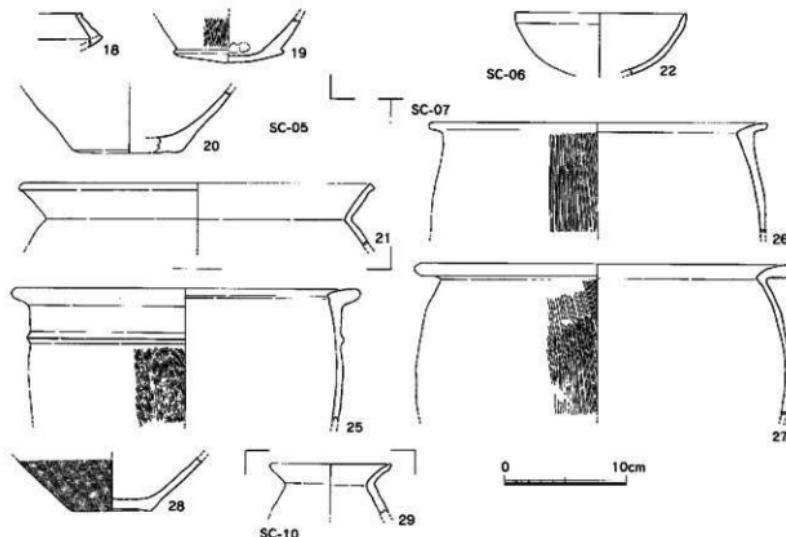


Fig.13 SC出土遺物実測図2 (1/4)

SK-09 (Fig.19、PL.4)

SK-08に切られる。平面は長軸1.5m、短軸1.3mを測る楕円形を呈する。深さは約20cmを測り、底面はほぼ平坦である。出土遺物は確認されなかった。

SK-11 (Fig.19)

調査区北側に位置する。平面は長軸1.4m、短軸1.1mを測る。深さは約35cmを測り、底面は中央部がやや深くなる。時代の特定できる遺物は出土しなかった。

SK-12 (Fig.19)

調査区北側に位置し、SX-O2を切る。平面は長軸1.1m、短軸90cmの不定形を呈する。

出土遺物 (Fig.21) 55は甕の下部、56は須恵器の脚部の破片である。遺構の時期は6世紀後半以前が考えられる。

SK-13 (PL.4)

調査区北側にて検出され、SC-O6に切られる。幅約50cm、長さ2.2mの溝状を呈し、深さは15cmを測る。

出土遺物 (Fig.21) 57は甕である。口縁はく字を呈し、胴部の最大径はほぼ中央に位置し、底部は小さい凸レンズ状をもつ。器壁の外表面はタテハケ、内面は横ハケの調整をおこなっている。遺構の時期は弥生時代後期中ごろに位置づけられる。

SK-14 (Fig.19)

調査区東側に位置し北側を別の遺構に切られる。平面は長軸は1.2m以上、短軸1.05mを測る長楕円形を呈する。深さは17cmを測り、西側壁は緩やかに立ち上がる。

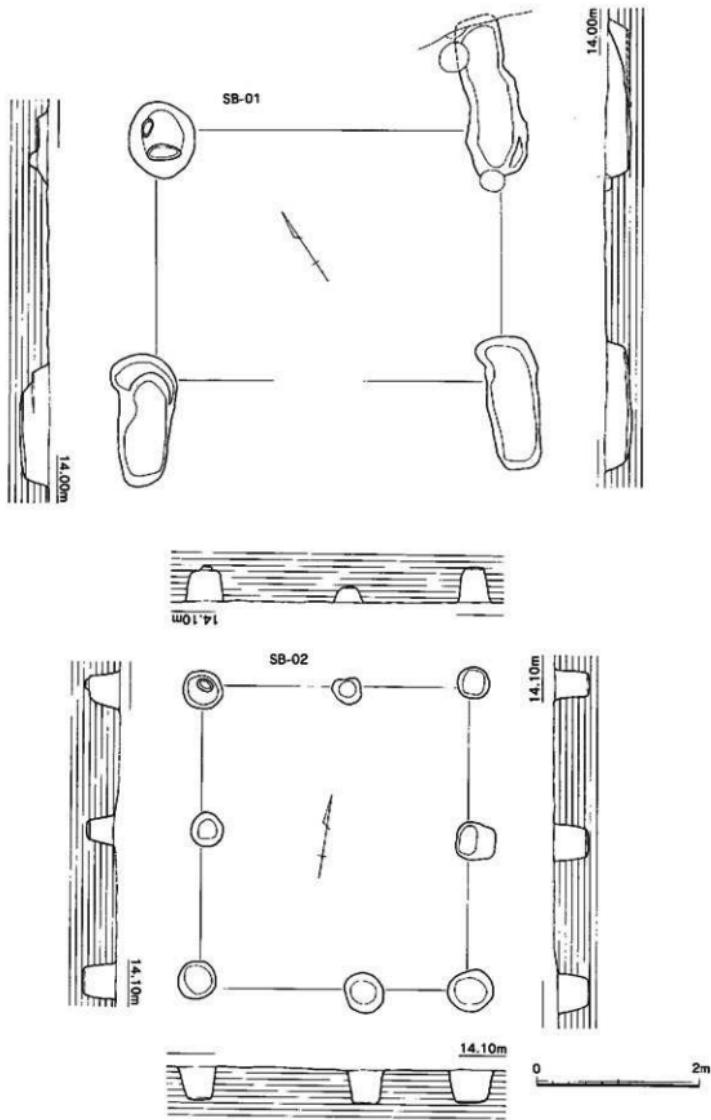


Fig.14 SB-01、02実測図 (1/60)

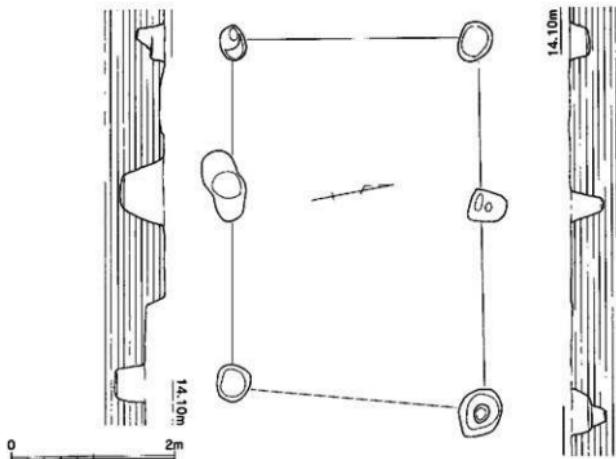


Fig.15 SB-03実測図 (1/60)

出土遺物 (Fig.21) 59~62は壺の口縁である。すべて錐形口縁を呈するもので、口縁端部はやや垂れるものを含む。遺構の時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

SK-15 (Fig.19)

SK-14の西側に位置する。平面は長軸1.3m、短軸1.1mの隅丸方形を呈する。深さは約20cmを測り、中央部はやや低くなる。時代の特定できる遺物は出土していない。

SK-16 (Fig.19)

調査区北側に位置する。平面は長軸1.5m、短軸40cmの溝状を呈する。深さは約15cmを測り、底面は船底形を呈する。

出土遺物 (Fig.21) 63は錐形を呈する壺の口縁破片である。遺構の時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

SK-19 (Fig.20)

調査区北側に位置し、SC-O 1の西側に位置する。平面は長軸1.4m、短軸65cmを測る不定形を呈する。深さは35cmを測る。

出土遺物 (Fig.21) 64は壺の底部である。平底を呈すると思われ、遺構の時期は弥生時代の中期後半から後期前半まで考えられる。

SK-21 (Fig.20)

調査区北側に位置し、SK-19の南側に位置する。平面は長軸1.65m、短軸70cmを測る。深さは最大15cmを測り、底面は西側がやや深い。遺構の時期を特定できる遺物は出土していない。

SK-22 (Fig.20)

調査区北側に位置し、北側を攪乱に切られる。平面は長軸1.0m、短軸70cmを測る指円形を呈する。深さは13cmを測り、中央部がやや低い。遺構の時期と特定できる遺物は出土していない。

SK-23 (Fig.20)

調査区北側に位置しており、柱穴に切られる。平面は長軸1.5m、短軸約50cmを測る溝状を呈する。深さは15cmを測り、底面は船底形を呈する。遺構の時期を特定できる遺物は出土していない。

SK-24 (Fig.20)

SK-22の西側に位置する。平面は長軸1.1m、短軸48cmを測る長楕円形を呈する。深さは西側が深く17cmを測る。SB-O1の柱穴と形状は類似するが、この遺構と対応する遺構はみつからない。

出土遺物 (Fig.21) 65は鋤形を呈する甕のII線である。遺構の時期は弥生時代中期中ごろと考えられる。

SK-25 (Fig.20)

調査区北西側に位置する。平面形は長軸2.2m、短軸1.7mを測る梢円形を呈する。残存する深さは約5cmを測るが、底面の實際には凹みがあり、火を受け赤色化している。土器の焼成造構の可能性も考えられるが遺構の残存が悪く、これ以上の積極的な観察はできなかった。

出土遺物 (Fig.21) 66は甕の底部である。遺構の時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

SK-26 (Fig.20)

調査区北側に位置する。平面は1.4~1.5mの不整円形を呈する。深さは35cmを測り、遺構の壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 (Fig.21) 67、68は甕の上半部である。II線の断面はコ字形を呈する。69は甕の底部である。厚い底で強い上げ底を呈する。遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期前半に位置づけられる。

SK-33 (Fig.20)

調査区西側に位置する。平面は長軸2.1m、短軸1.1mの不定形を呈する。遺構の深さは約10cmを測る。遺構の時期を特定できる遺物は出土しなかった。

SK-41 (Fig.22)

調査区中央部西側にて検出された。北側は攪乱溝に大きく切られる。底部の規模は長軸1.5m、短軸1.1mを測る。時期の特定できる遺物は出土していない。

SK-42 (Fig.22, PL.4)

調査区中央部西側にて検出された。SK-41の東側に位置する。長辺2.2m、短辺1.2m、深さ50cmの圓丸長方形を呈する。遺構の性格は貯蔵穴が考えられる。

出土遺物 (Fig.23, PL.6) 70、71、72は甕である。板付II式aの範疇に含まれるが、器壁はやや厚く地域性を示すと思われる。また、ハケ目を残すことから、やや新しい傾向を有する。この遺構は今回の調査において最も時期的に遡るものである。

5) 溝 (SD)

SD-O1 (PL.5)

調査区北側にて検出した。微高地を二分するようにN-45°-Eに方位をとる溝状遺構である。北側でSD-O2を切り、SD-O8に切られる。全体で約57m検出した。溝の北側は調査区外へのび、南側は削平のため途中までしか検出されなかった。溝の規模は検出面において幅1.8~2.3m、深さ45cm前後を測り、断面形は逆台形を呈する。溝底は北東から南西方向に緩やかに下っている。底面は多少の凹凸がみられる。覆土は断面で大きく上下二層に分けられ、上層は暗黄褐色砂質土、下層は茶褐色砂質土である。流入土、自然堆積土とおもわれ、砂層は含まれず顯著な流水の痕跡は認められない。

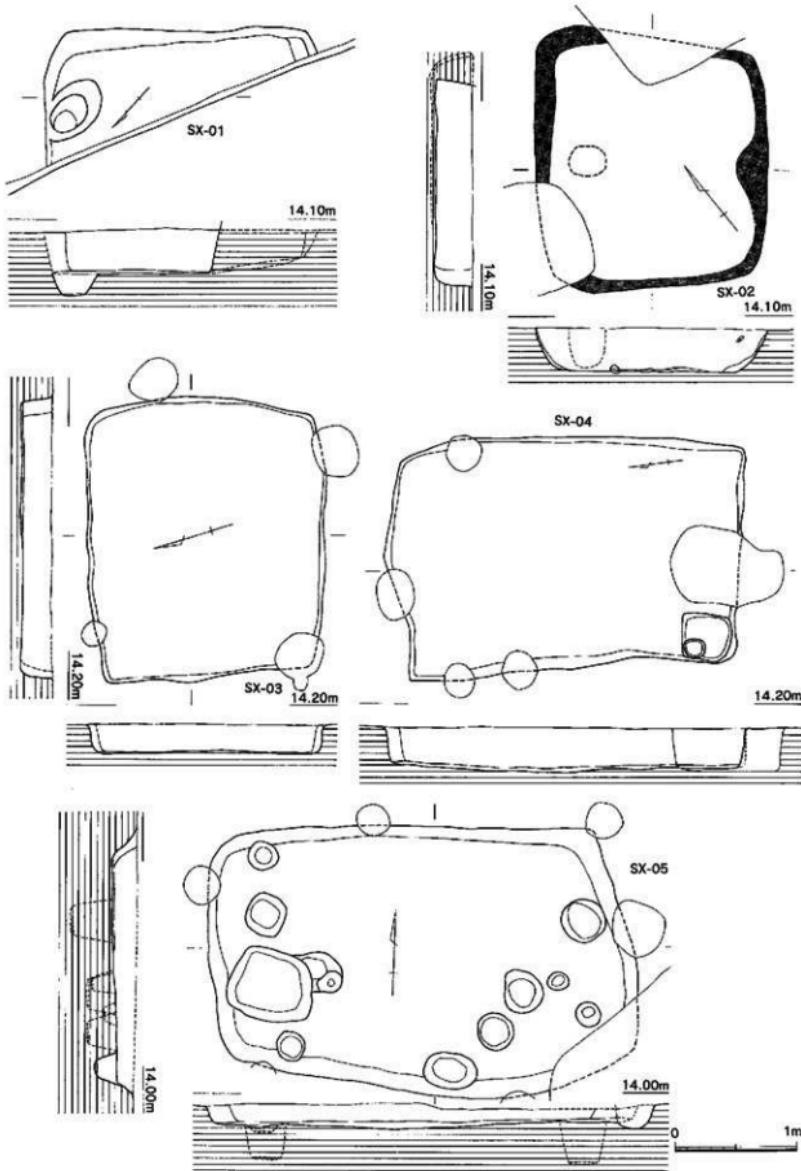


Fig.16 SX-01~05実測図 (1/40)

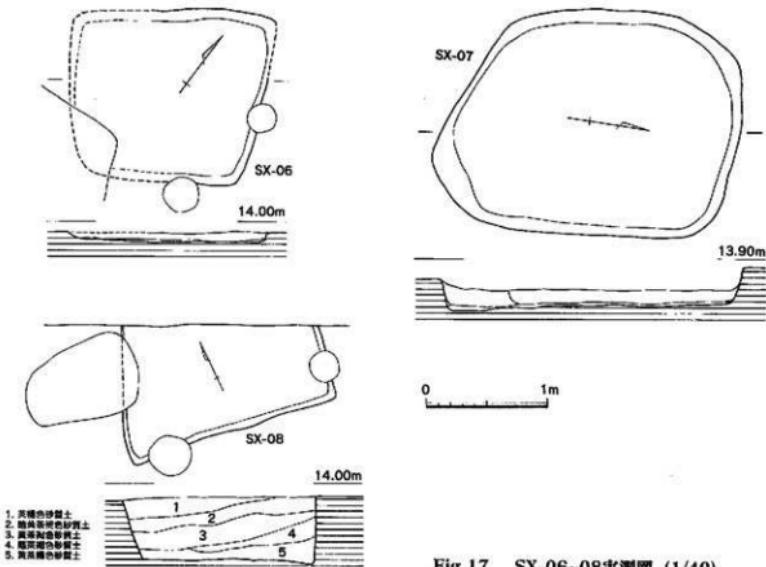


Fig.17 SX-06~08実測図 (1/40)

また、上・下層間で遺物の出土状況、時期差はみられず短期間に埋没したものと思われる。

出土遺物 (Fig.24, 25) 溝内の覆土中からは整理箱34箱の多量の遺物が出土した。ほとんどが弥生時代の上器類であった。壺には須次式系のものと跳ね上げ口縁系のものがある。73~75は鬱先口縁の壺の上部の破片である。73はII縁外面の一部に赤色顔料が少量みられる。74は口縁端部にキザミがみられ器壁外面に赤色顔料を塗布するものである。76は大型壺の上半部で胴部的最大径は45cmを測る。口縁下に突帯を貼りつけるものである。77, 78は跳ね上げ口縁をもつ壺である。80~84は壺の底部である。全体的に薄く仕上げられ、平底ないしは僅かに上げ底となるものである。85は大型壺の底部かと思われる。86, 87は壺の底部である。底は薄く仕上げられた平底である。88~90は鬱先口縁をもつ広口の壺である。89は器型の外面と頸部の内面に赤色顔料を塗布している。91は直口の壺である。92は壺の下部であり、内面に赤色顔料がみられる。93, 94は高壺の脚部で長脚(93)と短脚(94)のものがある。95は鉢のミニチュアのもので外面に断面三角形の突帯がめぐる。石器では叩き石(Fig.31-5)、砥石(Fig.31-6)、石包丁(Fig.31-7)がある。石包丁は破損品で穿孔間は3.4cmを測り、石材は小豆色凝灰岩ホルヘンスである。遺構の時代は遺物から弥生時代中期後半から後期初頭ごろに位置づけられる。

SD-O2 (P.L.5)

調査区北側にて検出した。SD-O1と同じく微高地を切るようにほぼ磁北の方位をとる溝状遺構である。調査区北側でSD-O1に切られる。溝の南側は谷部の縁をまわると思われる。溝の規模は検出面で幅1.2~1.5m、深さ45cm前後を測り断面形はV字から逆台形を呈する。溝底は北側から南へ下る。覆土は大きく三層に分けられ上から暗赤茶褐色砂質土、黄色みを帯びた灰茶褐色砂質土、灰茶褐色粘質土である。SD-O1と同じく顕著な流水の痕跡はみられない。

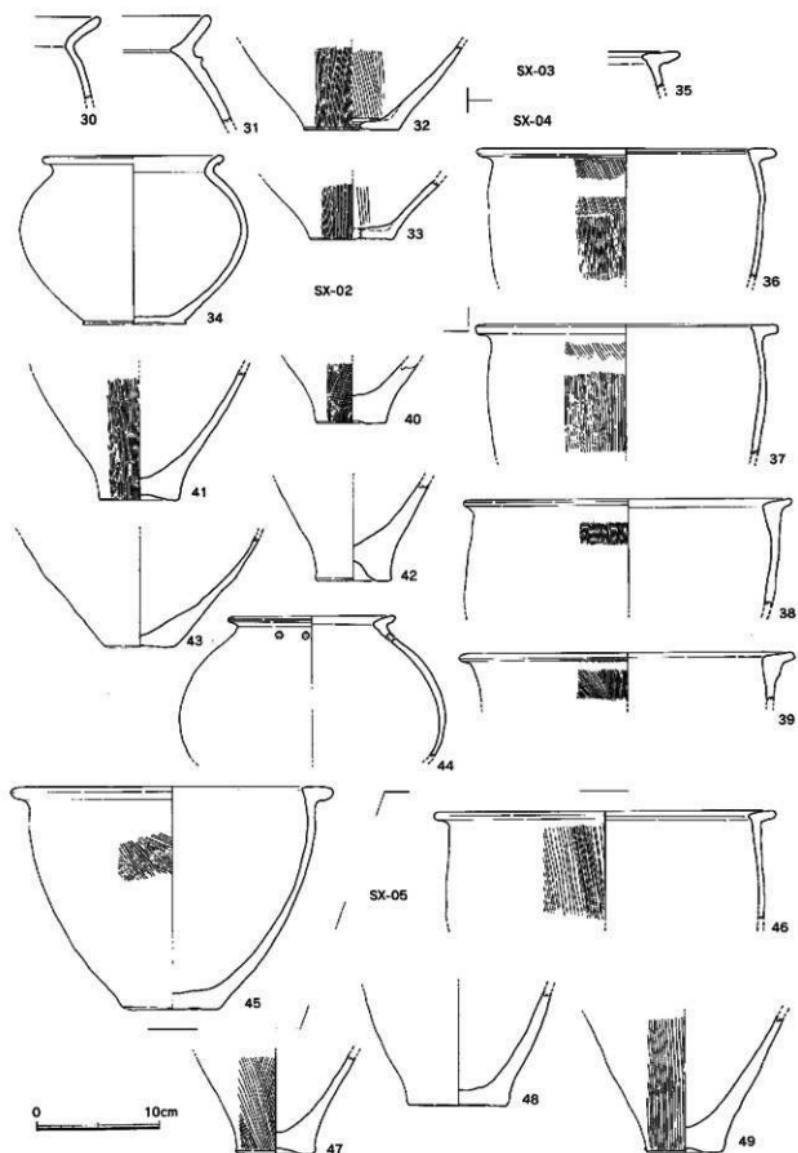


Fig.18 SX出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物 (Fig.26~28) 覆土中から整理箱32箱の多量の遺物が出土した。96~102は須玖式系の鋲先口縁をもつ壺である。体部は膨らまず、底部はやや上げ底となる平底である。99と101には口縁下に断面三角形の突帶をめぐらすものである。103~107は跳ね上げ口縁系のもので104には口縁下に断面三角形の突帶をめぐらすものである。108は鋲先口縁をもつ甕棺の上部である。109~125は甕の底部である。全体的に薄く仕上げられており、平底ないし僅かに上げ底となるものである。121は焼成後穿孔がおこなわれている。126~128は鋲先口縁をもつ広口壺である。126、128の器面外側には赤色顔料が塗布されている。129、130は広口壺である。129は器壁外面と口縁部内面に赤色顔料が塗布されている。130は口縁端部が跳ね上げ口縁状になっている。131は直口壺である。器壁外面と頸部内面に赤色顔料が塗布されている。132は壺の体部である。器壁の外面に赤色顔料が塗布されている。133、134は口縁が外側に大きく屈曲する壺である。134の口縁部には2穴の穿孔がみられる。135は口縁端部がコ字形を呈するもので器壁の外面と頸部の内面に赤色顔料が塗布される。136は口縁が外側に大きく屈曲するもので、器壁外面と頸部内面に赤色顔料が塗布されている。137~139は甕の底部である。底部は薄く仕上げられており、137、138は器壁外面に赤色顔料が塗布されており、139は底部に焼成後穿孔がみられる。140は鉢である。底部に焼成後穿孔が施されている。141は高杯の杯部である。器壁内外面に赤色顔料が塗布されている。142~144は高杯の脚部である。長脚(144,142)と短脚(143)がある。145~150は器台である。器台には精製145~147のものと、粗製148~150のものがある。石器には石包丁の再加工品(Fig.31-4, PL.6)がある。これは石包丁が穿孔部で破損したものに刃部を研ぎだしたものである。遺構の埋没時期は遺物から弥生時代中期後半の須玖J式の範疇に位置づけられる。

SD-O3 (PL.5)

調査区北側にて検出された。微高地を切るようにN-10°-Wに方位をとる溝である。全体で12m検出した。北側は調査区外へのび、南側はSC-O5に削られる。溝の規模は検出面で幅1m、深さ40cmを測り、断面はV字からU字形を呈する。SC-O3、SX-O7、SC-O7、SC-O5に切られる。

出土遺物 (Fig.29) 151~153は甕の上部である。口縁部断面は「コ」字形を呈する。154は甕である。口縁が緩やかに開くものである。155は蓋である。156~161は甕の底部である。底は厚く、やや強い上げ底になっている。162は中央の支脚である。石器には石剣(Fig.31-8)が出土している。残存長は17.0cm、最大幅3.2cmを測る。中央部から折れており、同一の地点から出土した。遺構の埋没時期は遺物から弥生時代中期前半の須玖J式の範疇に含まれる。

SD-O7

調査区南側にて検出された。N-65°-Wに方位をとる溝状遺構である。全体で21m検出した。幅は1.8m前後、深さは約60cmを測り、断面形はU字形を呈する。東側は谷部から始まり、西側は削平のため途中でなくなる。溝底は西側の方が東側より約20cm低い。つまり、谷部からの水の引き込みであったと考える。

出土遺物 (Fig.29) 163は多孔式の瓶の底である。164は高杯の脚部である。遺構の埋没時期は遺物から5世紀代のものと考えられる。

SD-O8 (PL.5)

調査区中央部において検出された。N-33°-Wに方位をとり、直線的にのびる溝状遺構である。全体で32m検出した。幅は2.5~3.0m、深さ約60cmを測り、断面は逆台形を呈する。土層断面では大きく三層に分けられ、上層から黄茶褐色砂質土、茶褐色砂質土、灰茶褐色砂質土である。南東部は谷部か

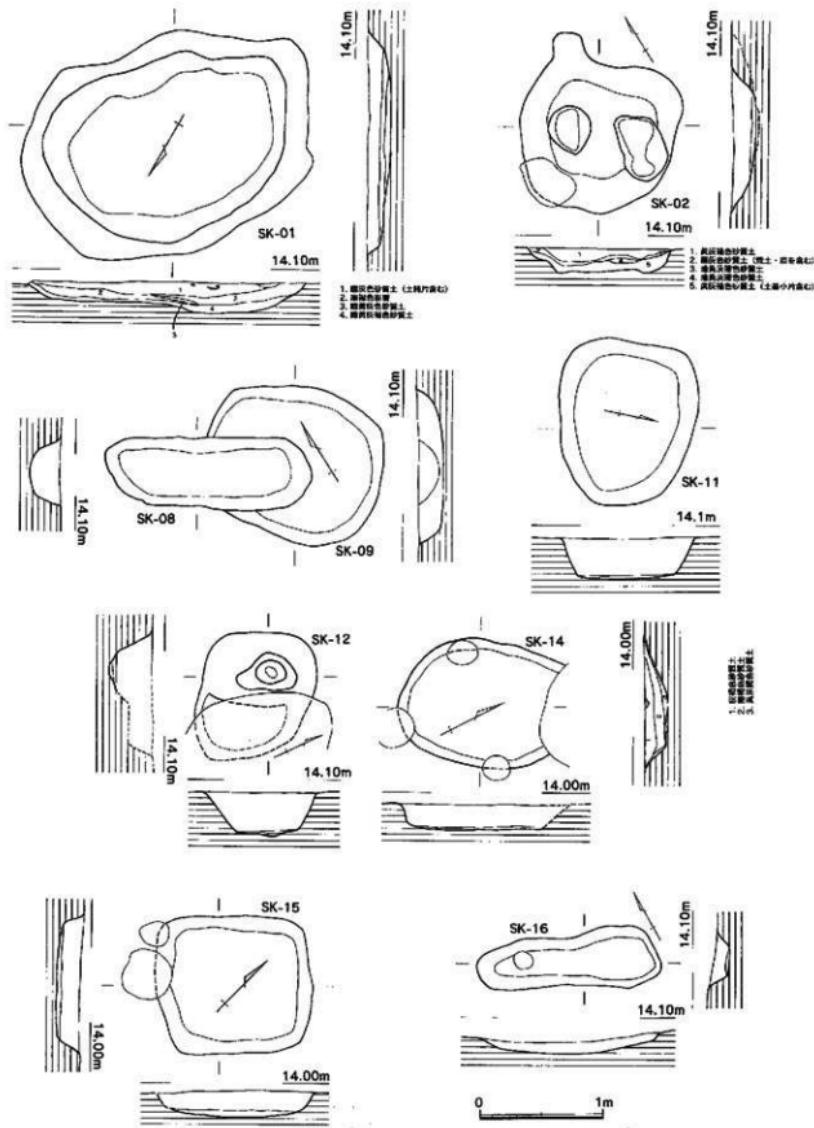


Fig.19 SK実測図I (1/40)

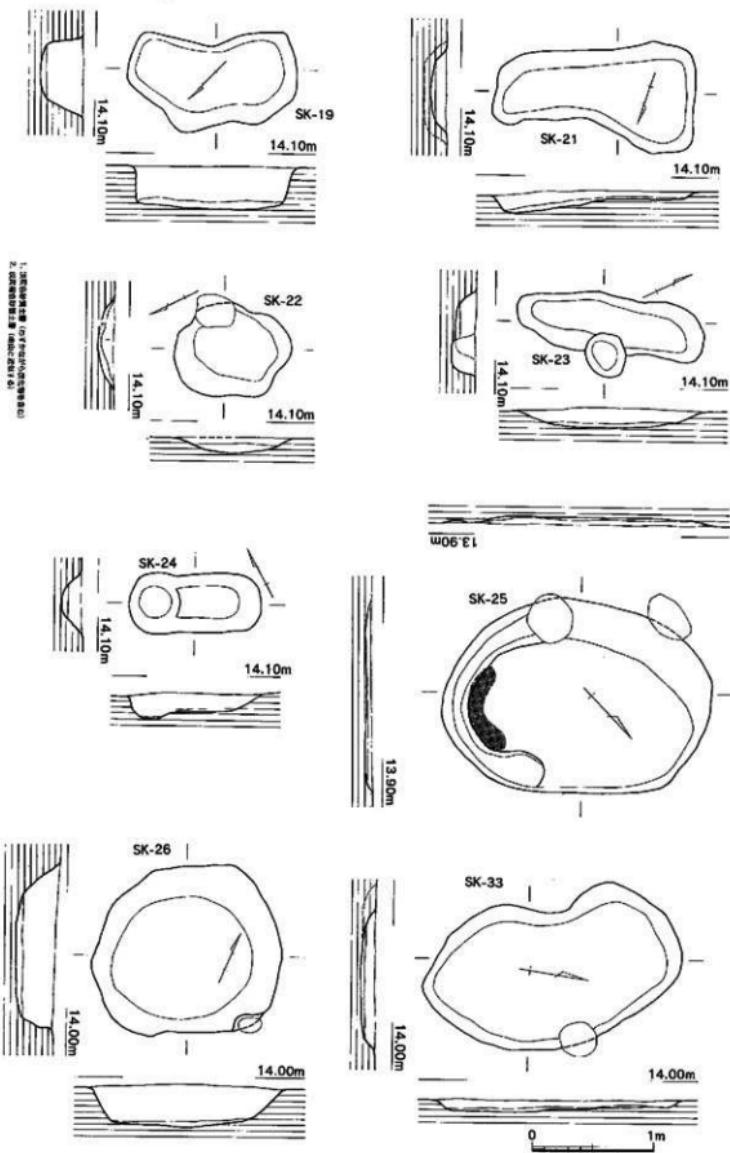


Fig.20 SK実測図2 (1/40)

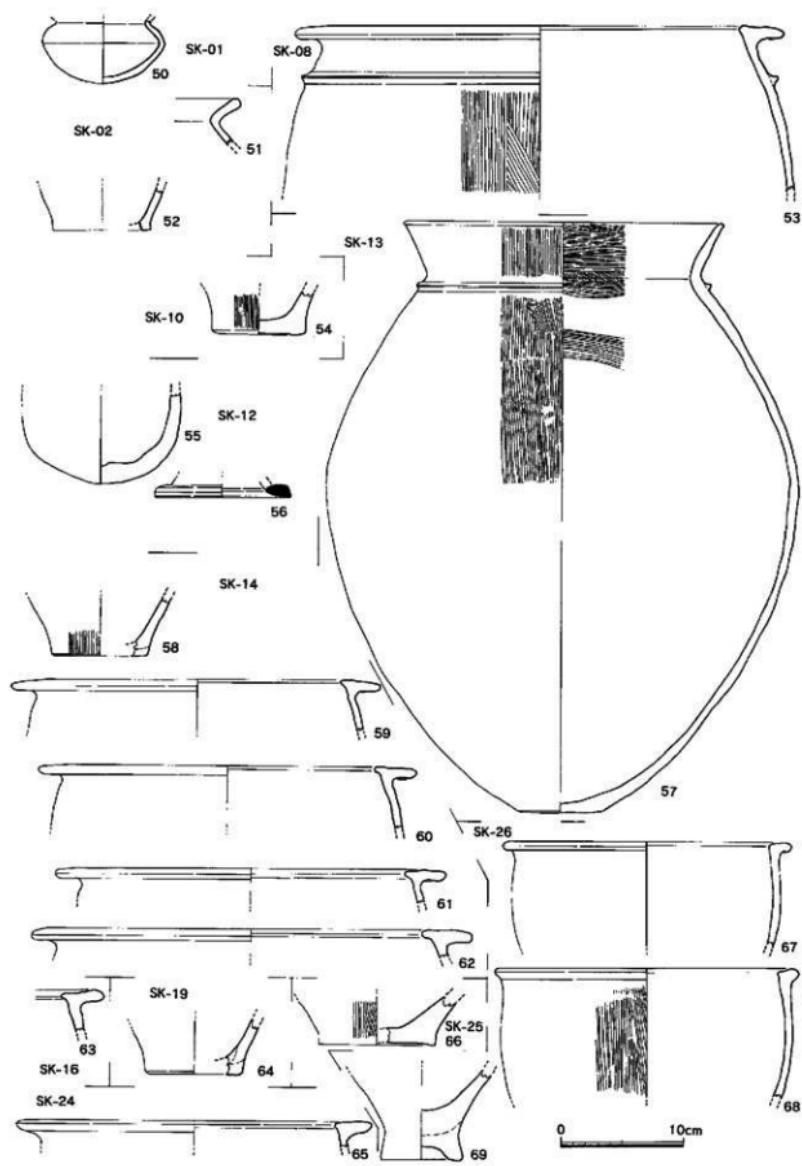


Fig.21 SK出土遺物実測図 (1/4)

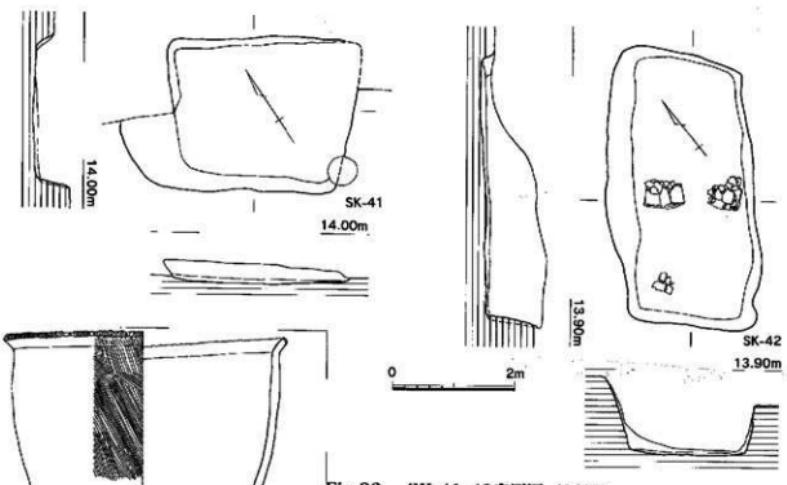


Fig.22 SK-41, 42実測図 (1/40)

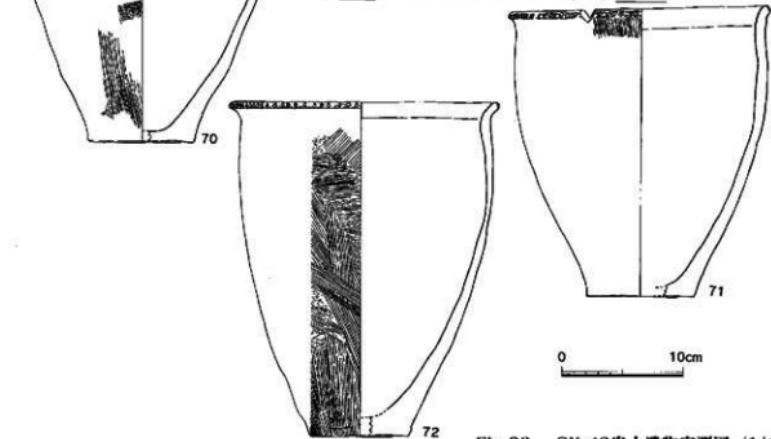


Fig.23 SK-42出土遺物実測図 (1/4)

ら始まり、北西部は調査区外へのびる。溝底は北西部は南東部に比べ20cm低い。よって谷部からの水の引き込みに利用したと考えられる。

出土遺物 (Fig.29) 165は甕の口縁部である。166～171は甕または壺の底部である。166の器面調整は外面がタタキ、内面はハケ臼である。平底のものと凸レンズ状を呈するものがみられる。172は複合口縁甕の口縁である。173は甕の上部である。174は瓢形土器の上部である。石器には不明滑石製品(Fig.31-9)が出土している。破損しているため全体の形状は不明であるが、中央部と思われるところに約6mmの穿孔がみられる。遺構の埋没時期は弥生時代後期中ごろに位置づけられる。

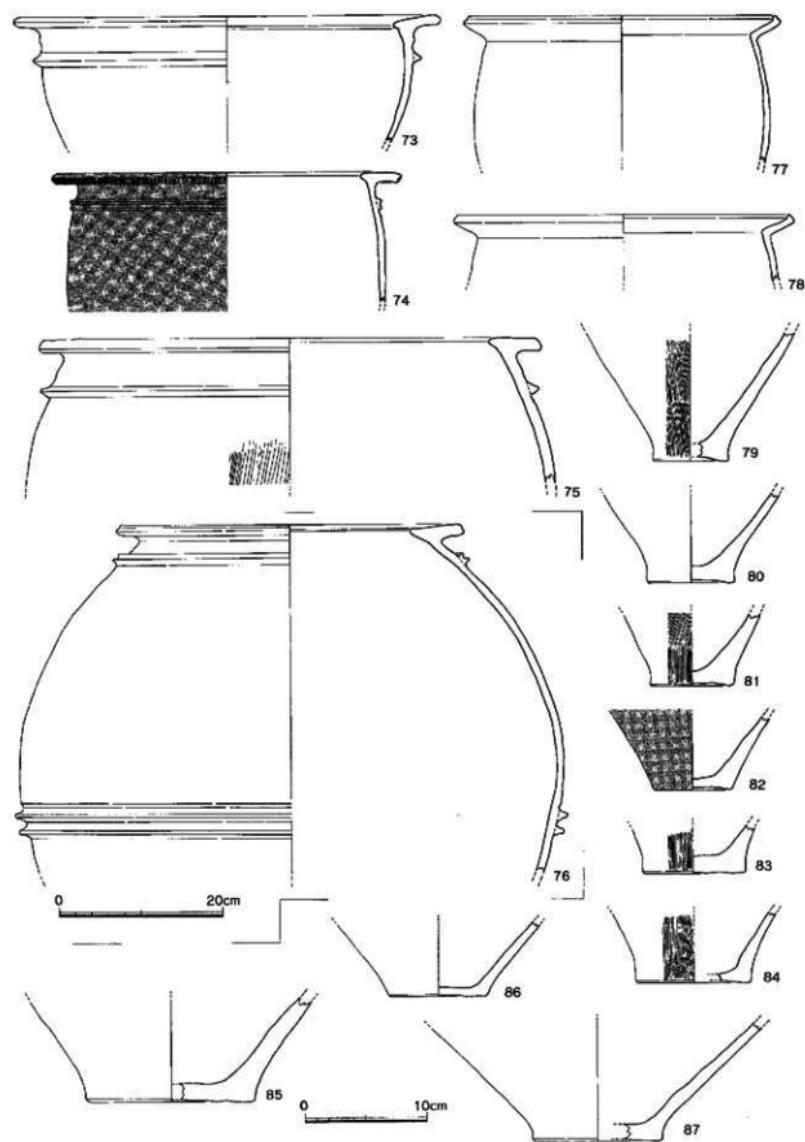


Fig.24 SD-01出土遺物実測図1 (1/4 · 1/6)

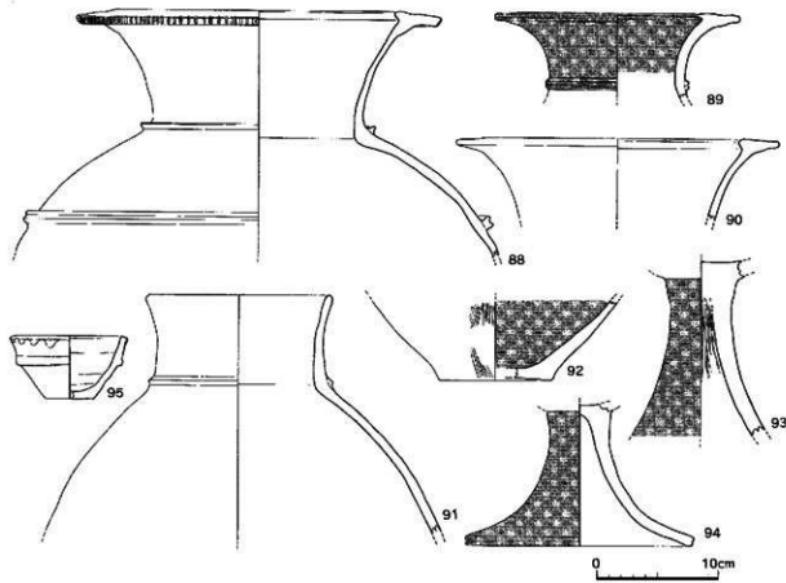


Fig.25 SD-01出土遺物実測図2 (1/4)

SD-09

調査区南側に位置する。N-83°-Eに方位をとる溝状遺構である。全体で20m検出した。幅は2.0m前後、深さは60cmを測り、断面は十層断面は大きく二層に分けられ、上層から灰黄褐色砂質土、灰褐色砂質土である。U字形を呈する。溝底はほぼ平坦でどちら側に水を流そうとしたのか不明である。

出土遺物 (Fig.30) 177、178は堀の口縁部である。石器では石剣(Fig.31-10)の一部が出土している。幅3.7cm、厚さ1.5cmを測り、断面は菱形を呈する。遺構の埋没時期は弥生時代後半ごろと考える。

SD-11

調査区北側にて検出された。N-9°-Wに方位をとり北側で東に屈曲し立ち上がり、南側はSD-01を切って立ち上がる。全体で10m検出した。幅は65~90cm、深さは35cmを測り、断面はU字形を呈する。

出土遺物 (Fig.30) 178、179は鉢である。180は堀の上部である。遺構の埋没時期は4世紀後半から5世紀ごろに位置づけられる。

SD-12

調査区北側のSD-02から続く溝状遺構である。O2は直線的に谷部に向かい、谷の縁をめぐる方向を大きく変え、また削平のため底部が一部浅くなり、同一遺構の確認が得れないため遺構番号を変えて遺物の取り上げをおこなった。溝は調査区南端においても幅1.5m、深さ約50cmで溝の規模も同一である。

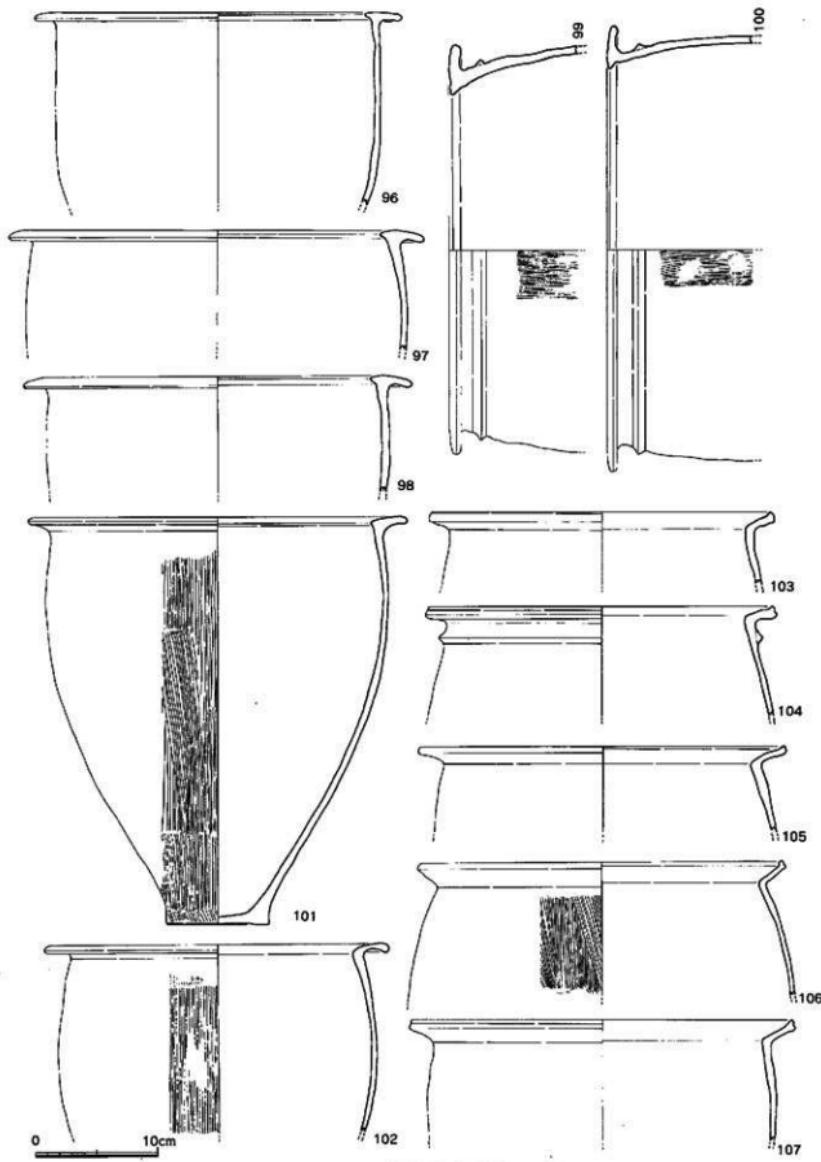


Fig.26 SD-02出土遺物実測図1 (1/4)

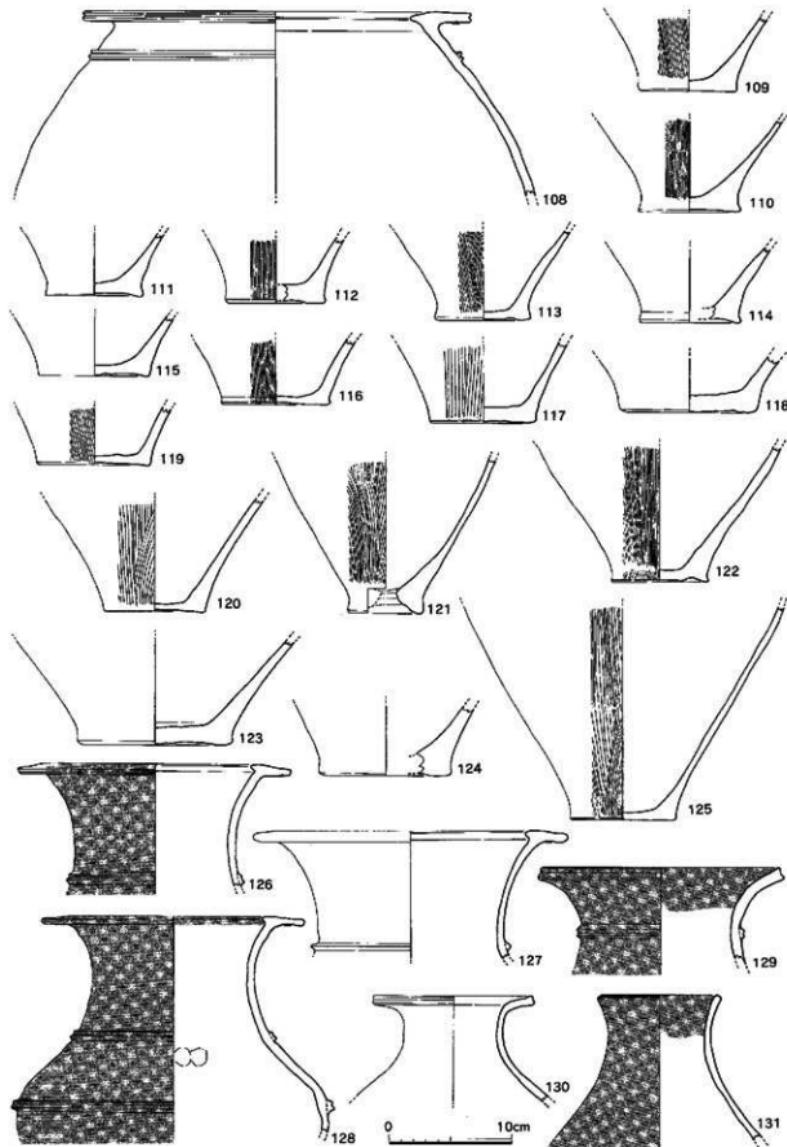


Fig.27 SD-02出土遺物実測図2 (1/4)

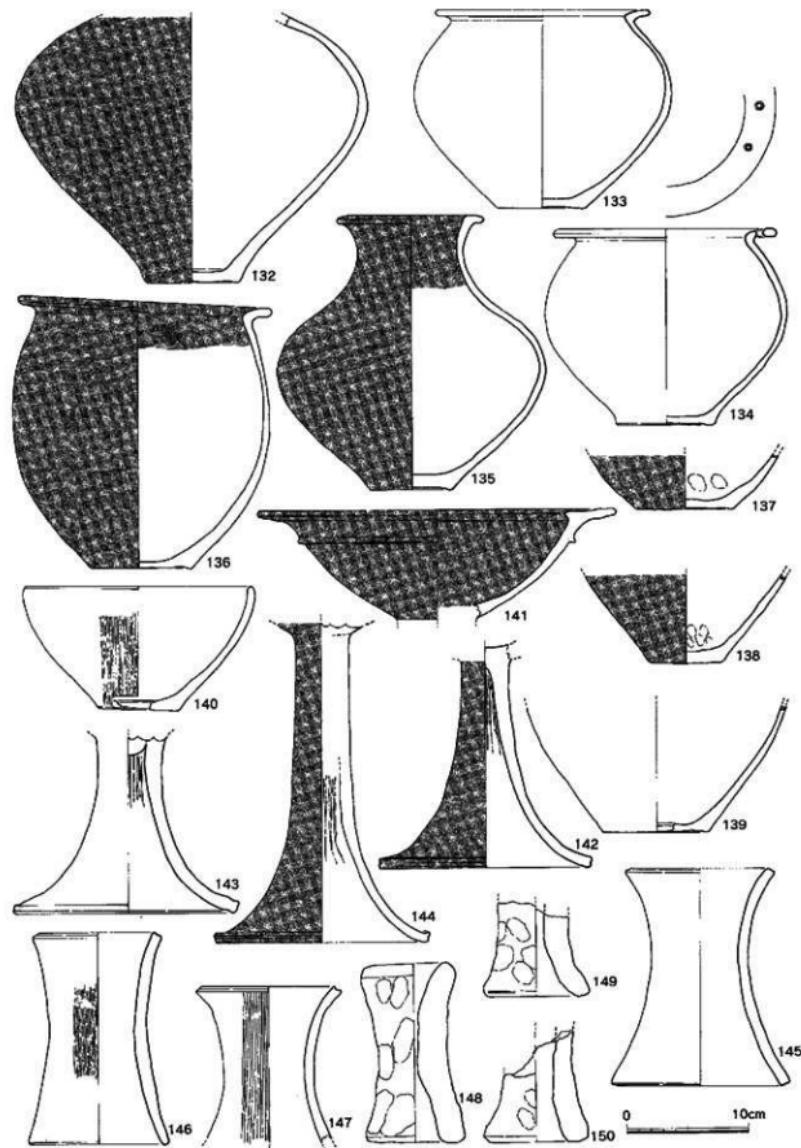


Fig.28 SD-02出土遺物実測図3 (1/4)

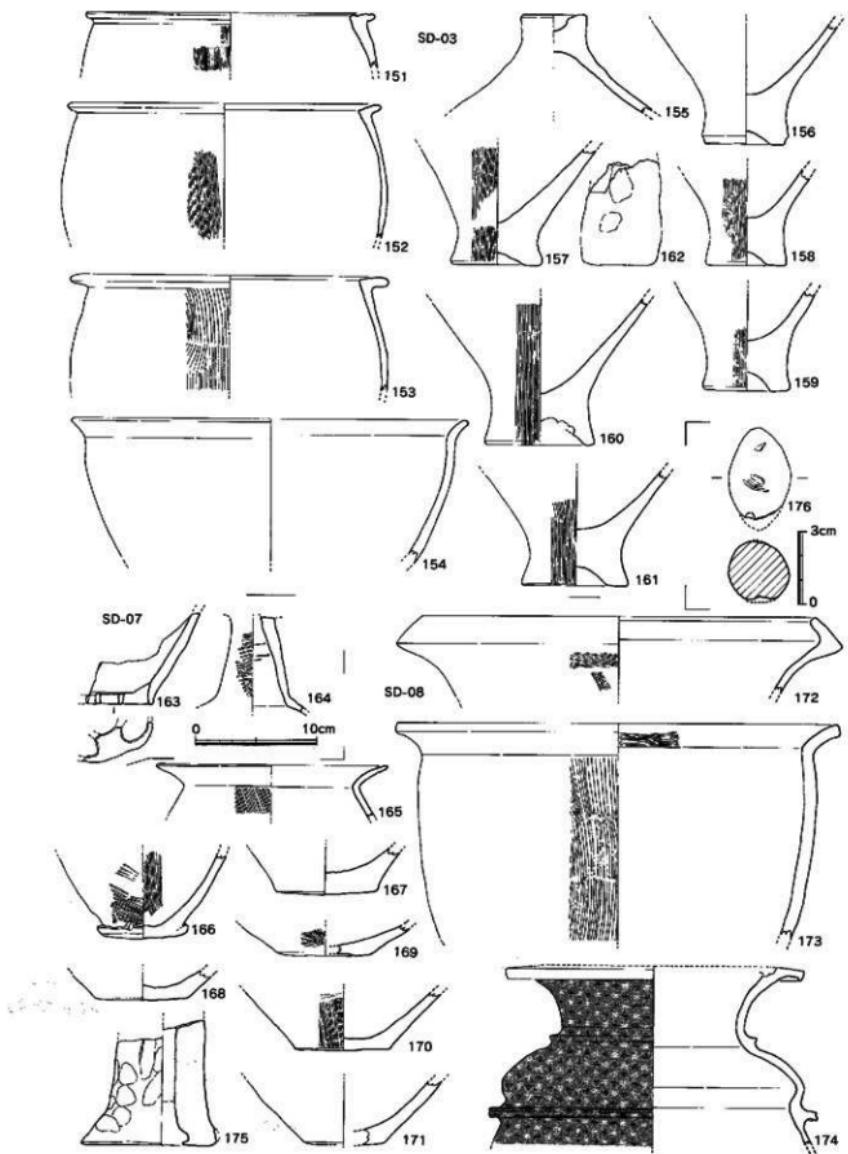


Fig.29 SD出土遺物実測図1 (1/2・1/4)

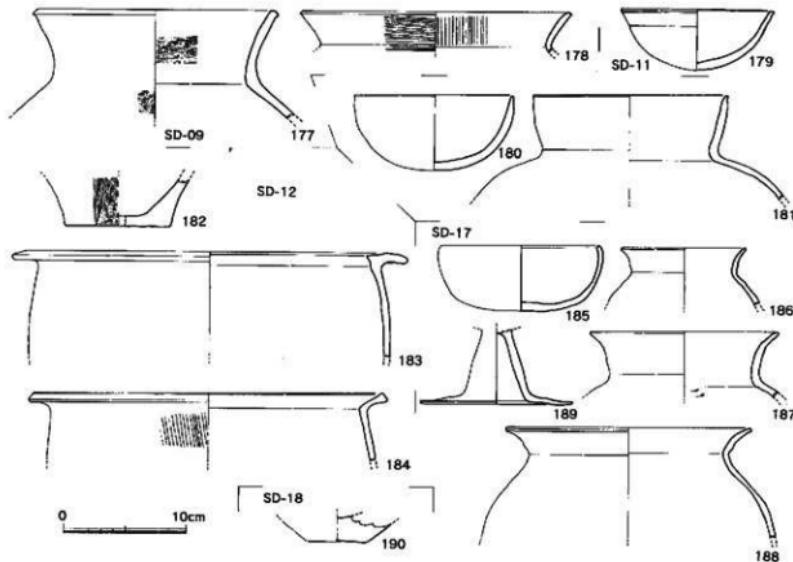


Fig.30 SD出土遺物実測図2 (1/4)

出土遺物 (Fig.30) 182は壺の半底の底部である。183は須玖系の鋤先口縁をもつ壺である。134は跳ね上げ口縁系の壺の口縁である。遺物も中期後半の須玖「式」に属するもので、SD-O2の遺物とも矛盾しない。

SD-17

調査区中央部東側に位置する。N-75°-Eに方位をとる溝状遺構である。全体で4.6mを検出した。溝の両端は、この長さで立ち上がり。幅は約80cm、深さ45cmを測り、断面はU字形を呈する。

出土遺物 (Fig.30) 185は鉢である。186～188は壺の上部である。口縁は緩やかに外反し、頸部の内面の稜は不明瞭である。内面はヘラ削り調整をおこなっている。189は高壺の脚部である。石器では砥石(Fig.31-16)が出上している。遺構の埋没時期は5世紀代に位置づけられる。

SD-18

調査区南側にて検出された。N-55°-Wをとり、SD-O7に切られる溝状遺構である。全体で19m検出した。溝の西側は緩やかに立ち上がり、東側は谷部に至る。幅1.1m、深さ10cmを測り、部分的に2本に分かれるが、残存が悪く溝底の起伏の影響でもともとは同一の遺構である。

出土遺物 (Fig.30)

出土遺物は少ない。190は壺の底部である。石器には右戈(Fig.31-11)がSD-12の交差部から出土している。全長7.1+ α cm、闊幅6.0+ α cmを測り、援が途中で折れたものに再加工を施し刃部を削りだしたものであるやや厚めに仕上げられている。遺構の時代はSD-12を切ることと、遺物から弥生時代後期の初頭ごろがあたられようか。

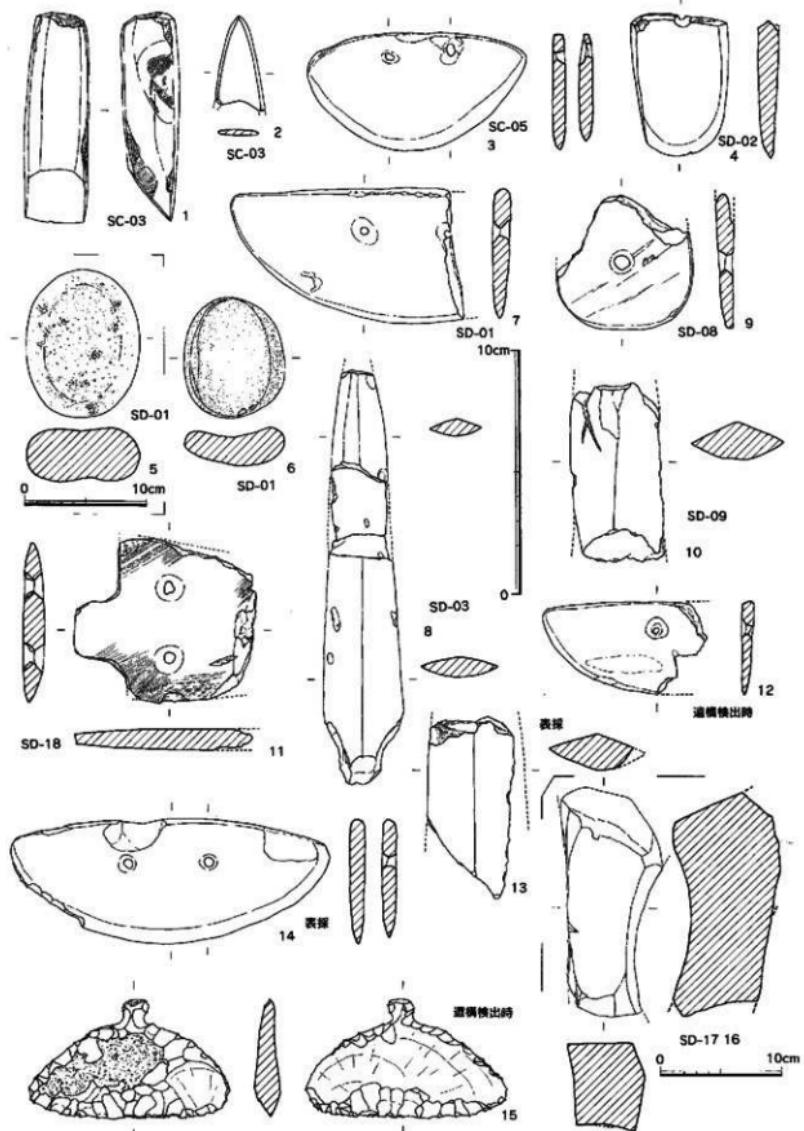


Fig.31 出土石製品 (1/2・1/4)

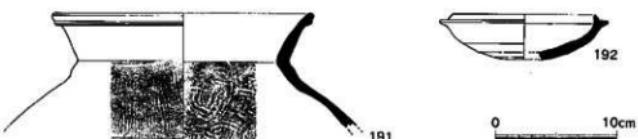


Fig.32 調査区南東谷部出土遺物 (1/4)

6) 調査区南東谷部 (Fig.32)

調査区南側にて検出された溝のほとんどが、この谷部と排水、取水関係にあるものである。東側調査区壁の観察では、覆土は大きく3層に分けられ上層から暗茶褐色砂質土、暗褐色砂質土、黃灰色砂質土であり、底は砾層であった。

出土遺物(Fig.32)

191は須恵器の甕である。口縁部は内外とも横ナデ、体部内面は同心円叩き痕が残り、体部外面には格子目叩き痕が残る。192は須恵器の坏身である。これらの遺物から、この谷が埋没した時期を6世紀末から7世紀初頭ごろに位置づけられる。

III 小結

蒲田部木原4次調査では、弥生時代前期から古墳時代にいたる竪穴住居、掘立柱建物、土塙、溝などを調査した。

弥生時代では前期の貯蔵穴と思われる遺構(SK-42)を検出したが、単独で検出され、同時期の遺構は他にみられなかつた。集落の様相を呈するのは弥生時代中期前半ごろであり、竪穴住居、溝、竪穴状遺構などが検出された。集落の最盛期は中期の後半とおもわれ、遺構の数や溝に廃棄された大量の土器などからそのことが読みとれる。また、居住域の拡大とも関連すると思われるが、弥生時代中期前半の溝であるSD-O3、中期後半のSD-O2、それよりも新しいSD-O1と時期が下るにつれ溝の位置が西側に広がっていくようである。

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけても同様に居住域として利用されている。また注目されるものに溝SD-O8があげられる。この遺構の性格は調査区内にみられる中期の溝とは異にし、断面を逆台形につくり、直線的に計画性をもって掘削されている。さらに異なる点は、中期の溝は降雨や生活排水など居住域の安定のための溝であるのに対し、この溝は谷部からの取水のために掘削されていることである。このことは人間の自然への積極的な働きかけという意味でも前代のものとは一線を画するものである。

古墳時代においては、さらに居住域が広がり、調査地と部木八幡の丘陵の間に位置すると考えられる谷部も後期には埋没するようである。今後の周辺の調査により、集落の変遷、土地の利用など、より明らかになることを期待する。

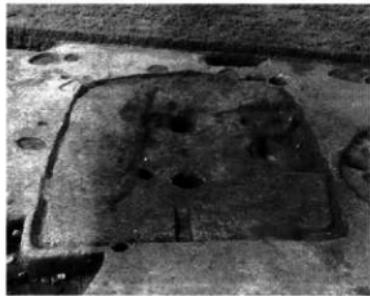
最後に、諸々の都合から十分な報告はできませんでしたが、今回の調査・整理にご協力、ご理解くださった多くの方々に心から感謝の意を表します。

蒲団部木原1次調査 出土土器觀察表 1

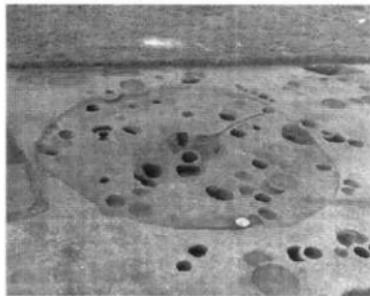
蒲田部木庭4次調査 出土土器觀察表 2



(1) 調査区全景(南から)



(2) S C-O 1 検出状況(南から)



(2) S C-O 2 検出状況(南西から)



(1) SC-O 3 検出状況(西から)



(2) SC-O 4 検出状況(東から)



(3) SC-O 5 植出状況(北西から)



(4) SC-O 6 植出状況(北西から)



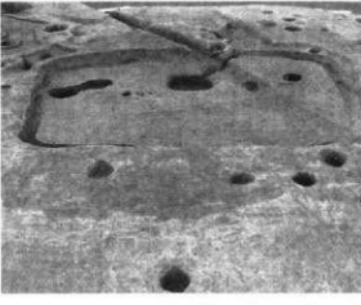
(5) SC-O 7 植出状況(東から)



(6) SC-O 8 植出状況(東から)



(7) SC-O 9、10 植出状況(北西から)



(8) SC-I 1 植出状況(北西から)



(1) S C - 1 2 検出状況(東から)



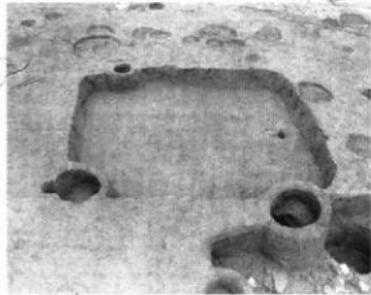
(2) S C - 1 3 検出状況(東から)



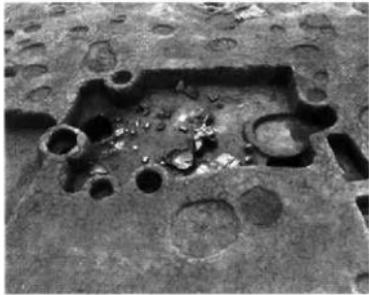
(3) S X - O 1 検出状況(北から)



(4) S X - O 2 検出状況(東から)



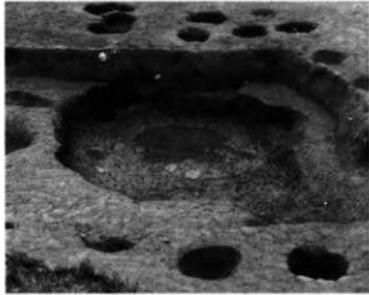
(5) S X - O 3 検出状況(南から)



(6) S X - O 4 検出状況(西から)



(7) S X - O 5 検出状況(南東から)



(8) S X - O 7 検出状況(北西から)



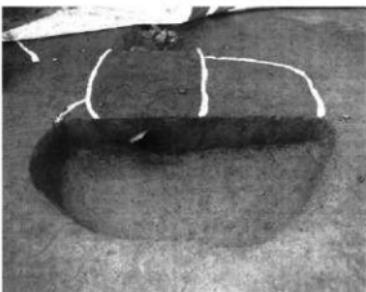
(1) SK-O8 検出状況(南から)



(2) SK-O1 検出状況(北東から)



(3) SK-O2 検出状況(南西から)



(4) SK-O8、O9 検出状況(東から)



(5) SK-13 検出状況(北西から)



(6) SK-26 検出状況(南西から)



(7) SK-42 検出状況(北から)



(8) SK-42 遺物出土状況(西から)



(1) SD-O 1 検出状況(北東から)



(2) SD-O 1 遺物出土状況(北東から)



(3) SD-O 2 検出状況(北から)



(4) SD-O 2 遺物出土状況(北から)



(5) SD-O 3 掘削状況(北西から)



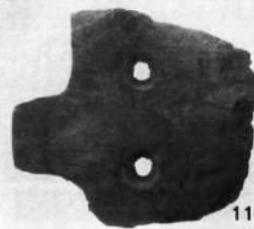
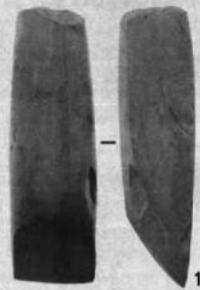
(6) SD-O 3 石剣出土状況(西から)



(7) SD-O 8 土層断面(南東から)



(8) 溝検出状況(東から)





Ph.1 調査区と部木八幡古墳群を望む(北西から)

蒲田部木原4次

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第531集

1997年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 大同印刷株式会社
